

狹山市埋蔵文化財調査報告書8

小山ノ上 遺跡 6 次

城ノ越 遺跡 5・6 次

八木 遺跡

御所の内 遺跡 5 次

宮ノ越 遺跡 3・5 次

1989

埼玉県狹山市教育委員会

狭山市埋蔵文化財調査報告書8

小山ノ上遺跡 6次

城ノ越遺跡 5・6次

八木遺跡

御所の内遺跡 5次

宮ノ越遺跡 3・5次

1989

埼玉県狭山市教育委員会

序

狭山市は、関東平野のほぼ中央に位置し、埼玉県西南部に当たる武藏野丘陵地帯にあります。

地形的には、名栗村から発して荒川に注ぐ入間川が市域の中央やや北寄りを貫流し、市街地を二分して河岸段丘を形成しています。この河岸段丘上は、おおむね平坦地で畠地と武藏野の平地林で形成されており、遺跡分布調査の結果66か所の遺跡の所在が確認されています。

昭和50年代に入り、開発に伴う宅地造成等が遺跡の所在地に多くなってきたことに対応して、遺跡の保護のため発掘調査を行って記録保存を実施しているところです。

本書は、昭和62年度に発掘調査を実施した遺跡7か所の記録保存の報告書です。ここに、その成果を明らかにして広く市民各位及び研究者のご指導、ご助言を仰ぐ次第です。

最後に、各遺跡調査をご快諾いただいた土地所有者、地元関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

狹市教育委員会

教育長 武居富雄

例　　言

1. 本書は、昭和62年度の埼玉県狭山市北部遺跡群内における個人住宅等の建設に伴う埋蔵文化財の発掘・確認調査報告書である。
2. 調査に伴う諸経費は、国及び県の補助により年度総額2,000,000円である。
3. 調査及び整理期間は、昭和62年4月6日～昭和63年3月4日までである。
4. 各調査の文化庁通知は、以下のとおりである。

小山ノ上遺跡 6次 昭和62年6月19日付 62委保記2-1688

城ノ越遺跡 5次 昭和62年7月10日付 62委保記2-2078

八木遺跡 昭和62年8月6日付 62委保記2-2231

御所の内遺跡 5次 確認調査

宮ノ越遺跡 3次 確認調査

城ノ越遺跡 6次 確認調査

宮ノ越遺跡 5次 確認調査

5. 発掘・確認調査は狭山市教育委員会が主体となり、小渕良樹が担当した。

6. 本書の執筆は文末明記の者、及び調査担当者が行い、図版の作成及び遺構・遺物の写真撮影は担当者と宮野将仁が行った。

7. 本書の作成は、狭山市教育委員会で行った。

8. 調査・報告にあたっては、次のみなさま方から有益な御指導・御教示を承りました。記して謝意を表する。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、飯田充晴、鹿島英明、齊藤裕司、曾根原裕明、

中平 薫、中村倉司、増田正博、県文化財保護課

調査協力員

今坂友生、大場敬子、甲田善徳、桜井ハル、田口文枝、田中きみ子、田中トキ、豊泉貞次、

平山 勝、福永弘幸、船木晃江、星野とり、堀美知子、宮野将仁、諸井芳子、矢島 勇、

山岸義造、山崎 誠、山本とし子、吉野博明、渡辺滝治

整理協力員

今坂友生、甲田善徳、齊藤通子、龍澤靖彦、竹内千代子、平山 勝、福永弘幸、三浦良子、

水越佳宏、水村弘子、宮野将仁、本吉明子、山川淑恵、山崎 誠、山崎好子、吉野博明

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第 1 章 調査に至る経過	1
第 2 章 狹山市及び周辺遺跡の立地と環境	1
第 3 章 小山ノ上遺跡 6 次の調査	5
第 1 節 遺跡の概要	5
第 2 節 調査経過	5
第 3 節 遺構と遺物	6
第 4 章 城ノ越遺跡 5・6 次の調査	9
第 1 節 遺跡の概要	9
第 2 節 調査経過	9
第 3 節 遺構と遺物	12
第 5 章 八木遺跡の調査	17
第 1 節 遺跡の概要	17
第 2 節 調査経過	18
第 3 節 遺構と遺物	18
第 6 章 御所の内遺跡 5 次の調査	29
第 1 節 遺跡の概要	29
第 2 節 調査経過	30
第 3 節 遺構と遺物	30
第 7 章 宮ノ越遺跡 3・5 次の調査	31
第 1 節 遺跡の概要	31
第 2 節 調査経過	33
第 3 節 遺構と遺物	33
第 8 章 結 語	35

挿図目次

- 第1図 狸山市及び周辺の遺跡図 (1/50,000)
第2図 小山ノ上遺跡周辺地形図 (1/5,000)
第3図 小山の上遺跡3・6次全測図 (1/300)
第4図 第5号住居跡 (1/60) 6次
第5図 第1・2号土塁 (1/60) 6次
第6図 出土遺物 (1/3)
第7図 城ノ越遺跡周辺地形図 (1/5,000)
第8図 城ノ越遺跡5次全測図 (1/300)
第9図 城ノ越遺跡6次全測図 (1/300)
第10図 第10号住居跡 (1/60) 5次
第11図 第11号住居跡 (1/60) 5次
第12図 第12号住居跡 (1/60) 5次
第13図 第5号掘立柱建物跡 (1/60) 5次
第14図 出土遺物 (1/3)
第15図 八木遺跡周辺地形図 (1/5,000)
第16図 八木遺跡全測図 (1/300)
第17図 八木遺跡出土遺物① (1/3)
第18図 八木遺跡出土遺物② (1/3)
第19図 八木遺跡出土遺物③ (1/3)
第20図 八木遺跡出土遺物④ (1/3)
第21図 八木遺跡出土遺物⑤ (1/3)
第22図 八木遺跡出土遺物⑥ (1/3)
第23図 八木遺跡出土遺物⑦ (1/3)
第24図 八木遺跡出土遺物⑧ (1/3)
第25図 御所の内遺跡周辺地形図 (1/5,000)
第26図 御所の内遺跡5次全測図 (1/300)
第27図 宮ノ越遺跡周辺地形図 (1/5,000)
第28図 宮ノ越遺跡3次全測図 (1/300)
第29図 宮ノ越遺跡5次全測図 (1/300)

図版目次

- 図版1 小山ノ上遺跡6次調査前全景
小山ノ上遺跡6次全景
図版2 小山ノ上遺跡6次第5号住居跡
小山ノ上遺跡6次第1号土塁
小山ノ上遺跡6次第2号土塁
図版3 城ノ越遺跡5次全景
城ノ越遺跡第10号住居跡
図版4 城ノ越遺跡第11号住居跡
城ノ越遺跡第12号住居跡
図版5 城ノ越遺跡第5号掘立柱建物跡
城ノ越遺跡6次全景
図版6 八木遺跡調査前全景
八木遺跡全景
図版7 八木遺跡出土遺物
八木遺跡出土遺物
図版8 八木遺跡出土遺物
八木遺跡出土遺物
図版9 御所の内遺跡5次全景
宮ノ越遺跡3次調査前全景
図版10 宮ノ越遺跡3次全景
宮ノ越遺跡5次全景

第1章 発掘調査に至る経過

狹山市は、埼玉県南部に位置しており、東京の新宿副都心から1時間以内の通勤圏にある。近年においては、東京のベッドタウンとして宅地造成が進み、年毎の人口増加率も著しいのを示している。

市教育委員会では、昭和57年度に遺跡の詳細分布調査を実施して遺跡図・地番表等の台帳を作成し、昭和58年度からは開発に伴う埋蔵文化財の破壊に対処するために、事前に記録保存のための発掘調査を実施している。

本調査報告書は、昭和62年度に実施した開発行為に先立つ7か所の発掘調査報告書である。遺跡名、所在地、事業者名、調査面積、調査期間は下表のとおりである。

この調査に至る経過は、農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部建築指導課から開発事前協議、建築確認等の申請段階で教育委員会がチェックをして遺跡台帳と照合のうえ現地調査を実施して遺跡の状況を確認する。そこで工事主体者（事業者）に連絡して協議をする。その結果、教育委員会が発掘調査の主体者となって記録保存を実施することとなった。

	遺跡名	所在地	事業者	面積	調査期間
1	小山の上遺跡6次	狹山市柏原字小山ノ上1248-4	吉田 市郎氏	330m ²	62年4月6日～4月10日
2	城ノ越遺跡 5次	狹山市柏原字城ノ越2319-3	金子 幸平氏	767m ²	62年5月1日～5月15日
3	八木遺跡 1次	狹山市大字笠井字八木2665-2	古谷 剛一氏	482m ²	62年5月21日～5月22日
4	御所の内遺跡5次	狹山市柏原字御所の内2438-16	久保田太郎氏	450m ²	62年6月15日～6月17日
5	宮ノ越遺跡 3次	狹山市柏原字宮ノ越3625	北田 好次氏	492m ²	62年11月5日～11月6日
6	城ノ越遺跡 6次	狹山市柏原字城ノ越2338	相原仙太郎氏	330m ²	63年2月17日
7	宮ノ越遺跡 5次	狹山市柏原字宮ノ越3626-5	宇佐美喜市氏	142m ²	63年3月3日～3月4日

第2章 狹山市及び周辺遺跡の立地と環境

狹山市は、埼玉県南西部に位置する人口15万人の都市である。主要交通路は、鉄路では西武新宿線と西武池袋線、道路では国道16号線と国道299号線がある。市の主要産業は農業であったが、昭和37年に川越・狹山工業団地、昭和46年に狹山工業団地が造成され、現在では工業製品出荷額が埼玉県第1位をほこる工業都市となっている。このなかで、東京環状線として機能している国道16号線が重要な位置を占めている。また、副都心新宿に約50分で行ける便利さは、東京方面への通勤圏として住宅適地となり、都市化現象もみられる。

〈立地〉

埼玉県の地形は、西部の山岳地から順次標高を下げ、武藏野台地等を経て東部の低地へと続く。中央部の台地は、山地から流れだす中小河川によって浸食され、多くの河岸段丘を形成している。

遺跡名		遺跡名		遺跡名	
1	東八木窯跡群	(22049)	29	上の原西遺跡	(22063)
2	八木遺跡	(22068)	30	半貫山遺跡	(22061)
3	八木北遺跡	(22021)	31	稲荷山遺跡	(22058)
4	八木上遺跡	(22022)	32	前山遺跡	(22059)
5	沢口上古墳	(22020)	33	高根遺跡	(22062)
6	笹井古墳群	(22019)	34	町久保遺跡	(22034)
7	沢口遺跡	(22080)	35	宮原遺跡	(22017)
8	宮地遺跡	(22018)	36	下双木遺跡	(22078)
9	金井遺跡	(22071)	37	上双木遺跡	(22077)
10	金井上遺跡	(22023)	38	上広瀬西久保遺跡	(22073)
11	上広瀬上ノ原遺跡	(22005)	39	東久保遺跡	(22070)
12	霞ヶ丘遺跡	(22004)	40	西久保遺跡	(22069)
13	今宿遺跡	(22002)	41	上諏訪遺跡	(22086)
14	上広瀬古墳群	(22001)	42	澁紙園遺跡	(22066)
15	森ノ上西遺跡	(22079)	43	峰遺跡	(22024)
16	森ノ上遺跡	(22008)	44	戸張遺跡	(22026)
17	富士塚遺跡	(22009)	45	掲植木遺跡	(22027)
18	鳥ノ上遺跡	(22010)	46	坂上遺跡	(22029)
19	小山ノ上遺跡	(22011)	47	稲荷上遺跡	(22032)
20	御所の内遺跡	(22012)	48	上中原遺跡	(22089)
21	英遺跡	(22074)	49	中原遺跡	(22025)
22	城ノ越遺跡	(22013)	50	沢台遺跡	(22079)
23	宮ノ越遺跡	(22016)	51	沢久保遺跡	(22041)
24	字尻遺跡	(22075)	52	下向沢遺跡	(22042)
25	丸山遺跡	(22037)	53	吉原遺跡	(22067)
26	金井林遺跡	(22035)	54	下向遺跡	(22085)
27	鶴田遺跡	(22044)	55	台遺跡	(22085)
28	上の原東遺跡	(22065)	56	稲荷山公園古墳群	(22052)

図中における日高町所在の遺跡は『日高町遺跡分布調査報告書』(1980)に、飯能市所在の遺跡は『飯能市遺跡分布地図』(1983)・『飯能 遺跡(1)』(1984)によった。なお鎌倉街道上道の筋道は埼玉県教育委員会『鎌倉街道上道』において推定されたものを記載した。



第1図 狹山市及び周辺の道路図 (1/50,000)

入間川もその1つで、市内では武藏野台地を開析して南部の狭山市街地をのせる段丘(武藏野台地)と、北部の広瀬・柏原地区等をのせる段丘(入間台地)を形成している。入間川の流れは、南西から北東に向いており、水富地区から開析谷の幅を徐々に広げ、川越市の落合橋付近で南東流していく越辺川と合流する。河岸段丘は南側で3段、北側では2段であり、上流の笛井では3段となっている。

狹山市南部では、入間川とおおむね同方向に流れる不老川に開析された地形を呈しているが、その川は冬の渇水期には流れがなくなり、開析の度合は進んでいない。

段丘上は、ほぼ平坦であるが微地形は複雑で、入間川の流れと同方向に埋没谷がいくつかみられる。段丘崖は急傾斜を呈し、湧水が認められる所もいくつかある。遺跡は、各時代を通じてこの段丘崖に沿って認められる。

〈狹山の遺跡〉

当市には、66か所の遺跡が所在する。時代別の遺跡数は、旧石器時代4、縄文時代44、古墳時代6、奈良・平安時代41である。遺跡の大半は、入間川の両岸段丘上に立地する。右岸は、入間川町の市街地をのせる段と入間基地をのせる段の2段に遺跡が所在し、左岸は笛井地区では3段に所在し、他は最上段に立地する。入間川流域以外では、左岸段丘の奥にある智光山公園を水源とする小河川の両岸に11遺跡が集中している。遺跡の時代別立地状況の特色は、特に認められない。次に各時代について概観する。

旧石器時代

遺物は、表採資料で数点発見されている。森ノ上西⑪・上中原⑫の両遺跡では、ナイフ形石器が発見されている。

縄文時代

時期別では、草創期2、早期3、前期19、中期37、後期16、晚期0である。草創期は、上広瀬上ノ原⑬・下並木⑭の両遺跡で尖頭器が発見されている。早期は、昭和44年に調査が実施された今宿遺跡⑮で茅山式期の野外炉が発見されている。前期は、昭和56年に調査を実施した掲櫛木遺跡⑯で黒浜期の住居跡を9軒検出し、多量の土器と石器が出土した。中期は、前期の掲櫛木遺跡と昭和46・56年に調査を実施した宮地遺跡⑰で住居跡61軒と板石住居跡3軒、土塙多数を検出し、昭和61年に調査を実施した森ノ上遺跡⑯で住居跡2軒と敷石住居跡4軒を検出した。宮地遺跡では、勝坂期から加曾利EⅣ期までの時期があり、環状集落を呈している。後期は、高根遺跡⑯の調査で堀之内期の包含層を検出し、多量の土器が出土している。

古墳時代

古墳群3か所と集落跡が確認されている。昭和56年に調査を実施した淹紙園遺跡⑯では、後期の鬼高峰期に属する住居跡を1軒検出している。古墳は、昭和53年の笛井古墳群の調査で半地下式構造を呈するものが1基検出されている。他にも、上広瀬古墳群⑯・稻荷山公園古墳群⑯で工事等で半地下式構造の古墳が発見されている。

奈良・平安時代

この時代は、狹山市で特に遺跡が多いところで、入間川の両岸台地上は当該期の遺跡がほとんど

である。調査した遺跡も多く、宮地・上広瀬上ノ原・今宿・森ノ上・富士塚⑪・小山ノ上⑫・城ノ越⑬・宮ノ越⑭・掲植木・樅荷上⑮の10遺跡がある。検出した遺構は、竪穴住居跡が254軒、掘立柱建物跡が55棟、墳墓6基である。

鎌倉時代以降

城柵関係では、入間川左岸に城山砦跡（②の一部）が所在する。現在、土壘と堀に囲まれた一廓が遺存している。このほかには、武藏野台地に特徴的に見られる深井戸が七曲井⑯・堀兼之井⑰・八軒家の井⑯の3基所在する。七曲井は、昭和45年に発掘調査を実施してロート状の掘り方と井桁を検出、多量の陶磁器が発見されている。これらの井戸は、埼玉県教育委員会が実施した歴史の道の調査で確認された鎌倉街道に隣接しており、この街道と密接な関係がうかがえる。街道は、3本の道筋（あへう）が確認されており、⑮は本道として、⑯は堀兼道として位置づけられている。⑯は、北が日高町女影付近を通り鳩山町今宿へ抜け、南は所沢市久米から東京都府中市へと抜けている。⑯は、所沢市内で⑮と分離して狹山市堀兼を通り、狹山市新狭山へと通じている。これらの道筋は、鎌倉時代以前の古道を整備したものともいわれており、奈良・平安時代の集落との関連が充分に考えられる。



第2図 小山ノ上遺跡周辺地形図 (1/5,000)

第3章 小山ノ上遺跡6次の調査

第1節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離で約2.5kmの地点に所在し、入間川左岸台地上の縁辺に位置している。標高は西端で61m、東端が54mで、入間川沖積地との境は急崖を形成し比高差は11mを測る。台地上はおおむね平坦で、北東に向かって傾斜して低くなっている。

分布調査による遺跡の範囲は480m×300m、面積にして101,000m²を測る。縄文時代中期・後期と奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和60・61年に5次にわたる調査を実施して奈良・平安時代の竪穴住居跡23軒、同掘立柱建物跡15棟、柵列1条、堀跡1条、溝1条が発見されている。

周辺で既に調査された遺跡としては、入間川の上流1.3kmに今宿遺跡、下流1.3kmに城ノ越・宮ノ越遺跡、対岸の下流2.2kmに掲櫛木遺跡があり、いずれも奈良・平安時代の集落跡で住居跡190軒、掘立柱建物跡55棟が検出されている。

調査区は、東西18m、南北22mの台形を呈しており、遺跡の中央やや東寄りに位置している。調査方法は、北東隅を基点として2×2mのグリッドを67個設定し、手振りで造構確認を行った。グリッド名は、北東隅を基点として南に向け数字、西に向け五十音とし(○-○)Gで表わした。調査の結果、竪穴住居跡1軒、土塙2基を検出した。本調査区は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施した1次調査区と隣接しており、そこで検出された第10号住居跡(1988・中村)の未調査部分を本調査で検出した。

基本土層は表土(耕作土)が20cmの厚さでローム面に達しており、耕作等の擾乱が著しくてローム層への漸移層は認められなかった。

第2節 調査経過

- 4月6日 調査開始。グリッドを設定して、4つに1つの割合で掘削を開始。
- 4月7日 前日に続いてグリッドの掘削。表土層がうすく、20~30cmの深さでローム面に達する。途中から雨となったので作業を中止。
- 4月8日 前日に続いてグリッドの掘削。土塙を2基検出した。南東隅の県道に接する部分で住居跡を検出した。昭和61・62年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施した住居跡の区域外にかかった未調査部分と思われた。
- 4月9日 造構の調査を実施。土塙・住居跡とともに床面を検出した。
- 4月13日 造構の写真撮影、各種図面を作成して調査を終了。

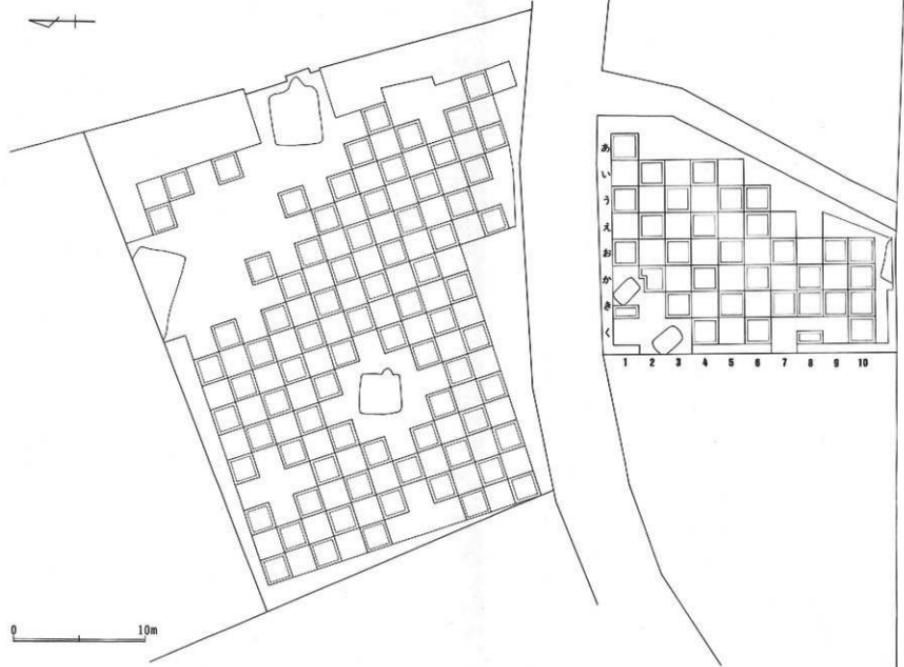
第二章 計算機之應用

在上一章我們已經知道，計算機的運算速度極快，而且其運算過程是完全準確無誤的。這就是為什麼它在許多領域中都有廣泛應用的原因。在這裡我們將要討論的是計算機在統計學上的應用。

統計學是一門研究如何收集、整理和分析數據的科學。它在社會科學、經濟學、醫學、工程學等領域都有重要應用。計算機在統計學上的應用主要表現在以下幾個方面：

- 資料收集：計算機可以自動化地收集和整理大量的資料，這大大提高了資料收集的效率。
- 資料整理：計算機可以根據一定的標準對資料進行排序、分類等操作，這使得資料的整理過程變得更加方便。
- 資料分析：計算機可以執行各種統計分析方法，如回歸分析、方差分析、因子分析等，這使得統計分析的過程變得更加準確。
- 模型建立：計算機可以根據已有的資料建立各種統計模型，這些模型可以幫助我們預測未來的趨勢。
- 決策支持：計算機可以根據統計分析結果提供決策支持，這使得決策過程變得更加科學。

總之，計算機在統計學上的應用為我們提供了許多便利，也使得統計學的研究工作變得更加高效和準確。



第3図 小山ノ上道路3・6次全剖図 (1/300)

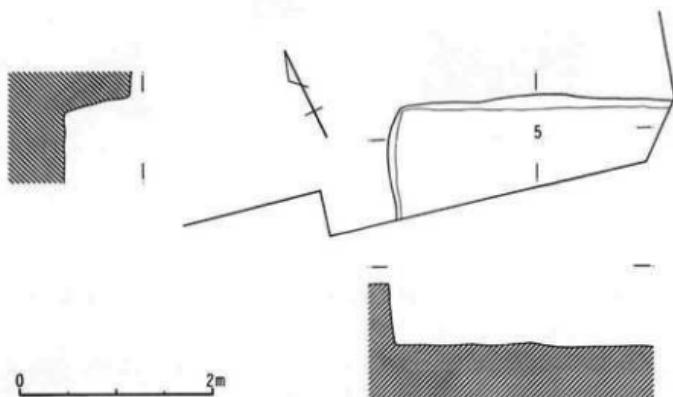
第3節 遺構と遺物

第5号住居跡（第4図）

本跡は、調査区の南端の（お・かー11）Gにて検出した。北東コーナー部が調査区域外にかかり調査できなかった。南側は1次調査で検出され、第10号住居跡と命名されている。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西3.85m、南北2.50mを測る。壁体は垂直に立ち上がり、75~85cmを測る。主軸方位は、N-107°-Eを示す。

出土遺物は、皆無であった。



第4図 第5号住居跡 (1/60)

第1号土塙（第5図）

本跡は、調査区北西端の（か・きー1）Gにて検出した。西南に3.50m離れて第2号土塙が所在する。両者とも長軸を略南北にとり、並列しているように見える。

平面形態は、南北に長い長方形を呈する。規模は長軸が2.07m、短軸1.21mを測る。底面は平坦で、深さ20cmを測る。壁体は、直立する。

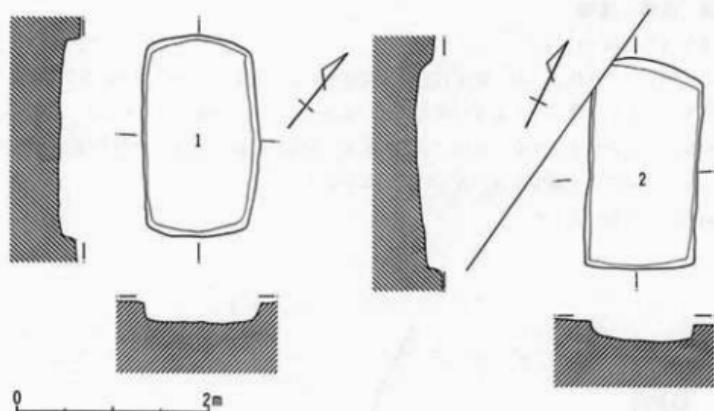
出土遺物は、皆無である。

第2号土塙（第5図）

本跡は、調査区北西端の（く-2・3）Gにて検出した。第1号土塙と同形態を呈する。調査区外に一部がかかり、全掘はできなかった。

平面形態は、南北に長い長方形を呈する。規模は長軸2.18m、短軸1.11mを測る。底面はほぼ平坦で、深さ20cmを測る。壁は傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物は、皆無である。

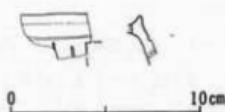


第5図 第1・2号土塚 (1/60)

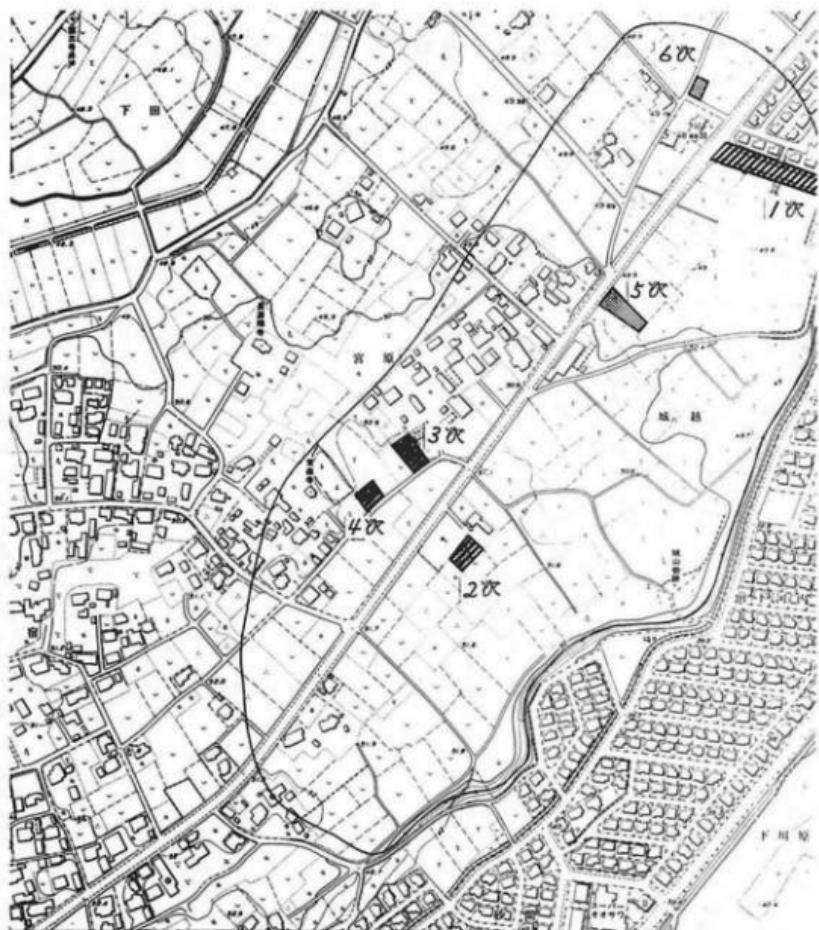
出土遺物 (第6図)

すべて、表土層からの出土であった。種類は、須恵器壺・蓋・甕・硯。土師器甕がある。いずれも小破片で、硯以外は図示できなかった。

硯 円面硯の一部分と思われる。口縁下に一条の沈線が巡る。体部には鋭利な刀物による窓が穿たれている。それと並んでやはり鋭利な刀物で垂直の沈線が2条引かれている。焼成良好。胎土は精良である。色調は灰白色を呈する。



第6図 出土遺物 (1/3)



第7図 城ノ越遺跡周辺地形図 (1/5,000)

第4章 城ノ越遺跡5・6次の調査

第1節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北へ直線距離で約3kmの地点に所在し、入間川左岸台地上の縁辺に位置している。分布調査による遺跡の範囲は、800m×350mで面積196,000m²を測る。台地上はほぼ平坦で、標高は南端が53m、北端で49mを測る。遺跡東側の沖積地との比高差は、約10mである。縄文時代前期及び奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和52年から61年までに4次にわたり調査を実施して、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟検出した。

周辺の道路としては、南に隣接して宮ノ越遺跡が所在する。昭和53年に埼玉県遺跡調査会により調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡64軒、同掘立柱建物跡18棟、同墳墓4基が発見されている。当遺跡との間には住居跡がなく、墳墓4基が存在していた。

5次調査区は、南北に長い長方形を呈しており南北43m、東西17mを測る。遺跡のはば中央に位置して、入間川の段丘崖から○m奥まったところに所在する。調査方法は、表土層が浅く20~30cmでローム面となり、また耕作によってひどく搅乱されている様子であったので重機を導入して排土を実施し、遺構確認作業を人力で行った。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒、同掘立柱建物跡1棟を検出した。

6次調査区は、方形を呈し南北20m、東西17mを測る。遺跡の北端に位置して、入間川の段丘崖から○m奥まったところに所在する。調査方法は人力によるグリッド掘削方法とし、北隅を基点として2×2mグリッドを42個設定した。南と西側は、工事用資材置場となっていて調査できなかつた。グリッドの呼称は、北隅を基点として南北に五十音、東西に数字として(○-○)Gで表わした。

第2節 調査経過

5次調査(昭和62年)

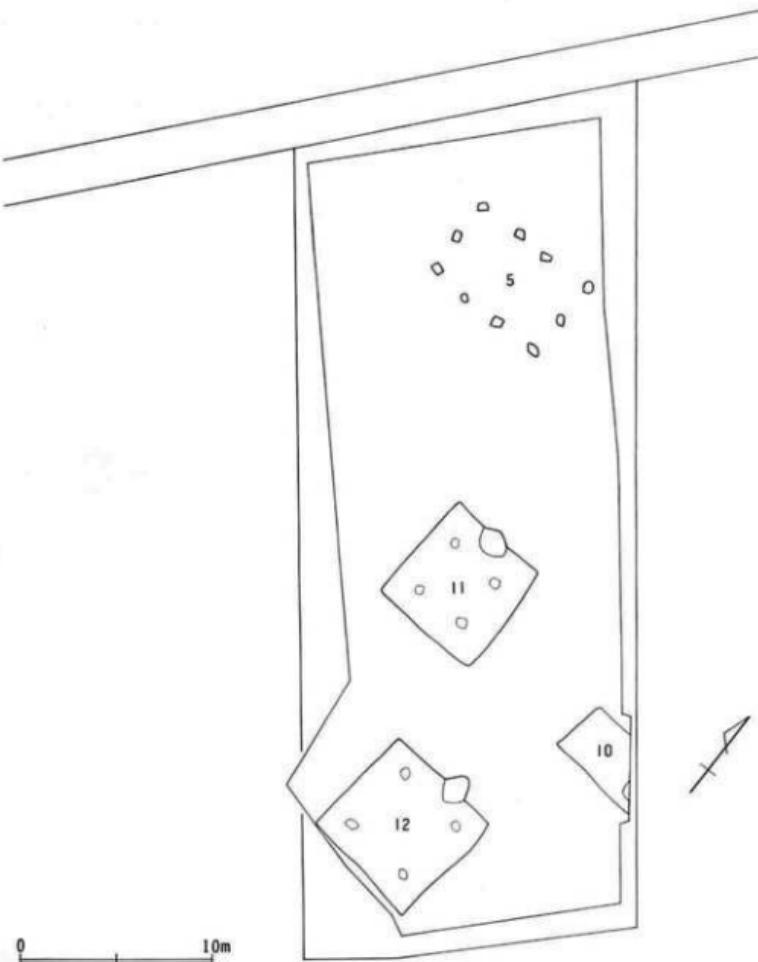
- 5月1日 調査開始。重機を導入して表土除去を実施、その後を人力にて遺構確認を行う。掘立柱建物跡の柱穴と思われるピットを検出した。
- 5月2日 重機による表土除去、人力による遺構確認を実施。調査区の北端で竪穴住居跡を検出。
- 5月3日 重機による表土除去。竪穴住居跡2軒を確認。
- 5月6日 人力による遺構確認を実施。遺構は、竪穴住居跡第10~12号の3軒と掘立柱建物跡第5号の1棟を検出した。
- 5月7日 遺構の調査を開始。第10号住居跡の調査で床・壁を検出する。ロームへの掘り込みが浅く、壁体は遺存部が少ない。第12号住居跡は床面を検出。
- 5月8日 第10号住居跡の壁溝を検出。第12号住居跡は、柱穴を4本検出して半分を切開する。第11号住居跡の調査を開始。北東壁は深耕のため破壊されている。
- 5月11日 第10号住居跡は、床面精査。第11号住居跡は、床面を検出。第12号住居跡は、柱穴の調査を終了して平面図・エベレーション図を作成。第5号掘立柱建物跡の調査を開始。

5月12日 第10号住居跡は、写真撮影を実施。第11号住居跡は、壁溝・柱穴を確認して調査を実施。

第5号掘立柱建物跡の柱穴を完掘し、写真撮影を実施。

5月13日 第10・11号住居跡の平面図・エレベーション図作成。第5号掘立柱建物跡の平面図・エレベーション図作成。全体測量図を作成し、全景写真撮影後各住居跡のカマド・床面の切開を実施。

5月15日 各住居跡の床面切開を実施。

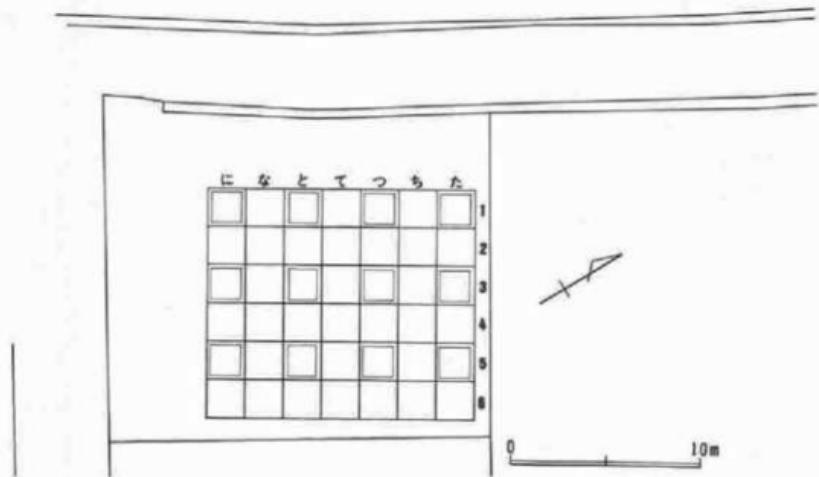


第8図 城ノ越遺跡5次全測図 (1/300)

5月16・18日 重機を導入して埋めもどして調査を終了。

6次調査（昭和63年）

2月17日 グリッドを設定し、4つに1つの割合で掘削。深さ30~40cmでローム面に達し、遺構確認を実施。遺構・遺物とも検出しなかったのでグリッドを埋めて調査を終了。



第9図 城ノ越遺跡6次全測図 (1/300)

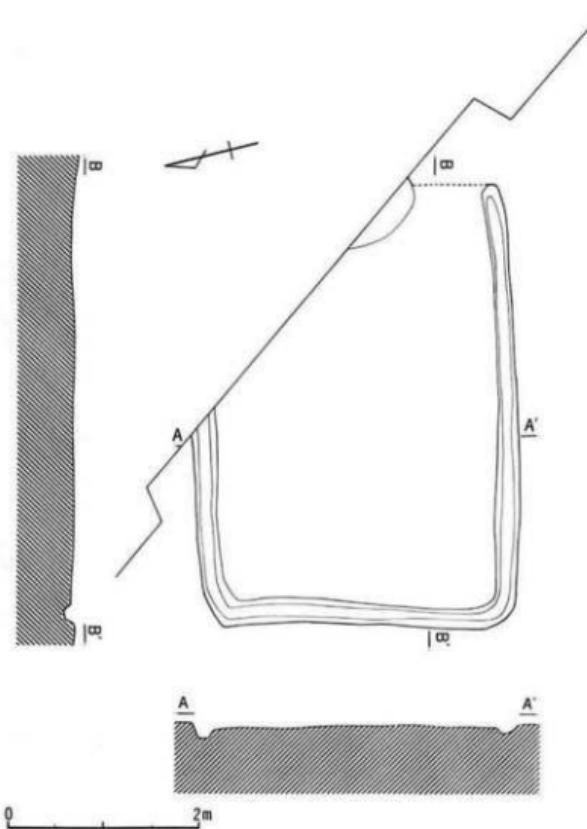
第3節 造構と遺物

第10号住居跡（第10図）

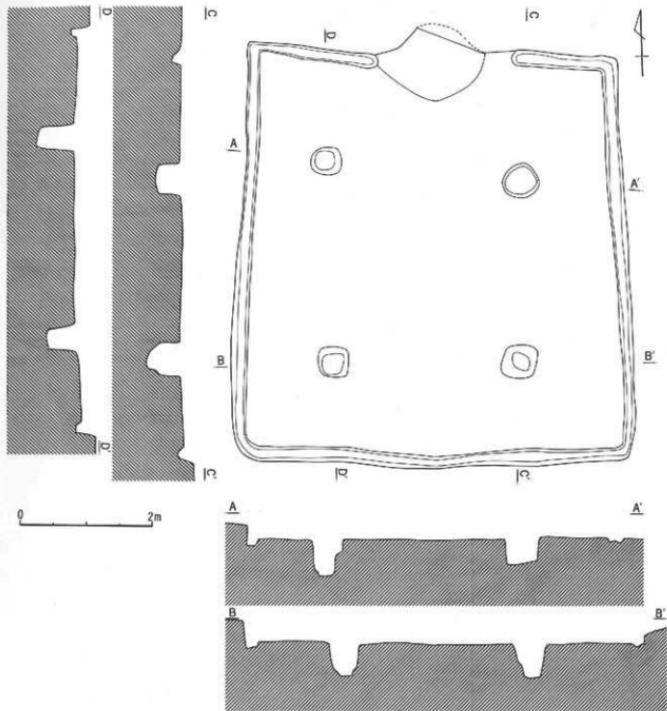
本跡は、調査区の東端にて検出した。北東コーナー部及びカマドが調査区域外のため不明である。西に6m離れて第11号住居跡、南に5.5m離れて第12号住居跡が所在する。耕作が著しく、また遺構のロームへの掘り込みが浅いため、壁溝と床面により住居跡の存在を確認した。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西4.63m、南北3.44mを測る。床面積は、約13.77 m²である。主軸方位は、N-102°-Eを示す。壁体は、ほとんど検出できなかった。壁溝は、東壁を除いて、調査した部分では巡っている。規模は幅20cm、深さ10cmを測る。床面は、部分的に硬化したところが認められる。柱穴は、検出されなかった。

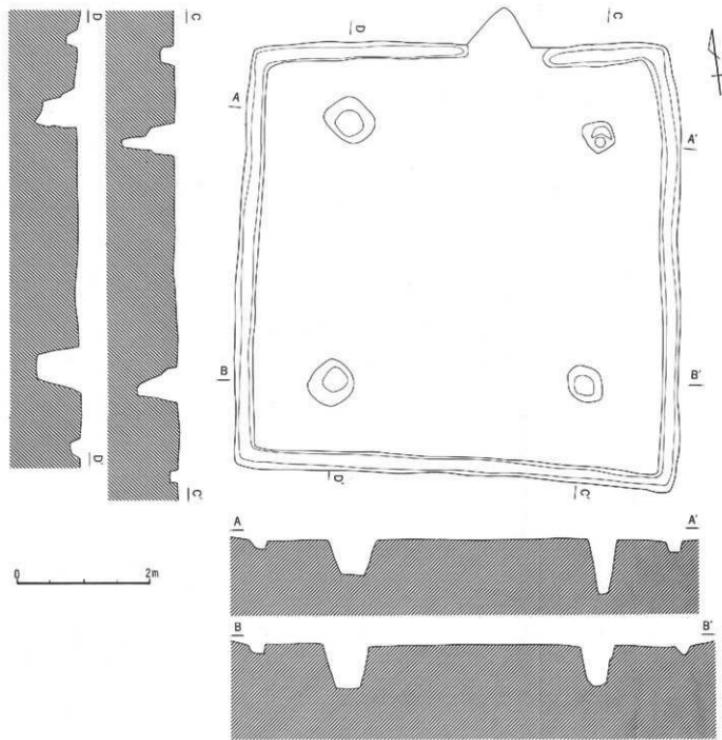
カマドは、東壁に所在する。区域外に大半が出ており、所在の確認しかできなかった。



第10図 第10号住居跡 (1/60)



第11图 第11号住居跡 (1/60)



第12図 第12号住居跡 (1/60)

出土遺物

少量出土している。種類は、須恵器壺・蓋・甕、土師器甕がある。いずれも細破片のため図示できなかった。須恵器壺の底部は、糸切り未調整のものだけであった。

第11号住居跡（第11図）

本跡は、調査区の中央に位置する。東に6m離れて第10号住居跡、北に9m離れて第5号掘立柱建物跡、南に5m離れて第12号住居跡が所在する。耕作の擾乱によって北東コーナー部が破壊され、この部分の壁体は消滅していた。大型の住居跡で4本柱をもち、よく整った住居跡である。

平面形態は、北壁が若干短いが正方形を呈する。規模は東西6.00m、南北6.15mを測る。床面積は、35.4m²である。主軸方位は、N-2°-Eを示す。壁体はほぼ垂直に立ち上がり、約30cm遺存している。壁溝は、カマドとその脇40cmほどの部分を除いて巡る。規模は幅24cm、深さ10~15cmを測る。床面は、全体が硬化している。柱穴は、4か所検出した。平面形態は、いずれも円形である。規模は、P₁が径55cm・深さ40cm、P₂が径52cm・深さ50cm、P₃が径50cm・深さ50cm、P₄が径46cm・深さ50cmを測る。柱穴間距離は、P₁-P₂間が2.22m、P₂-P₃間が2.31m、P₃-P₄間が2.59m、P₄-P₁間が2.46mをそれぞれ測る。柱穴に囲まれた部分（柱穴も含む）の面積は、11.22m²を測る。

カマドは、北壁の中央部に位置する。遺存状態が悪く、構造・規模等は不明である。

出土遺物

種類は、須恵器壺・壺・蓋・甕、土師器甕、鉄製釘がある。いずれも小破片のため図示できなかった。須恵器壺底部破片の観察では、すべて回転ヘラ削り調整が施されていた。

第12号住居跡（第12図）

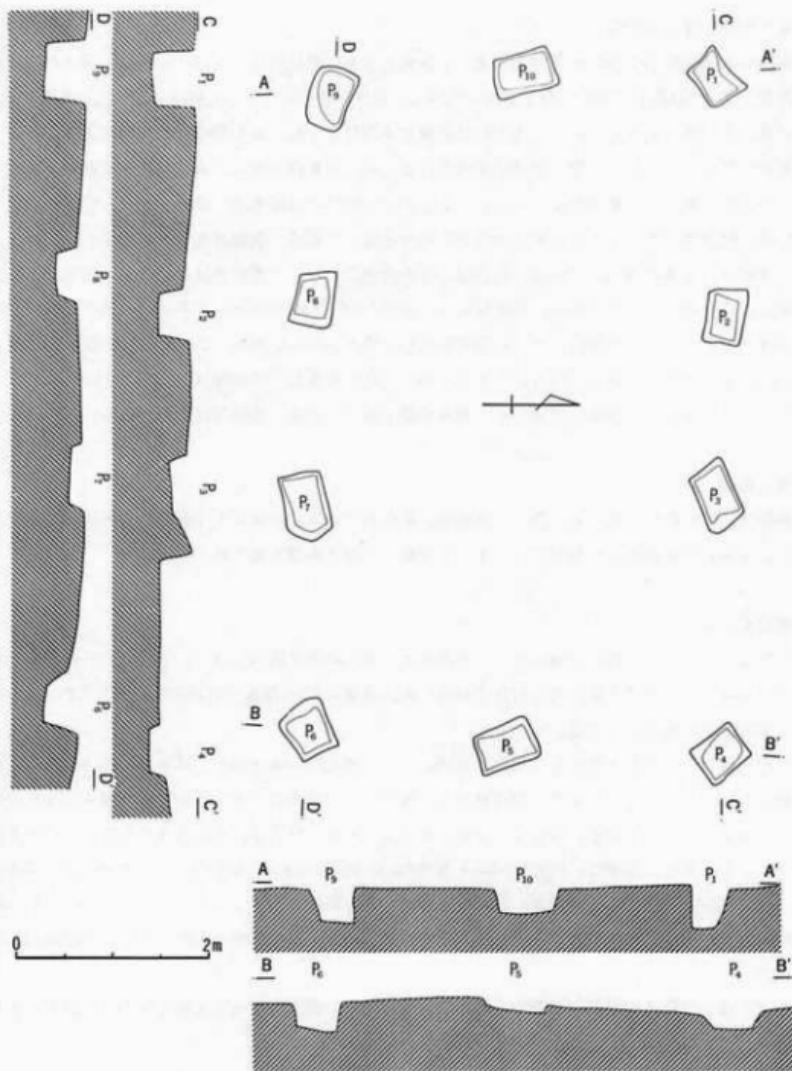
本跡は、調査区の南端にて検出した。本跡もロームへの掘り込みが浅く、また著しい擾乱のため壁体は遺存せず、壁溝と床にて住居跡を検出した。北東に5.5m離れて第10号住居跡、北西に5m離れて第11号住居跡が所在する。

平面形態は、正方形を呈する。規模は東西6.78m、南北6.49mを測る。床面積は37.8m²である。主軸方位は、N-9°-Eを示す。壁は検出できなかった。壁溝は、カマドを除いて巡る。規模は幅27cm、深さ10~20cmを測る。床面は、全体が硬化している。柱穴は、4か所検出した。いずれも円形プランを呈する。規模は、P₁が径50cm・深さ81cm、P₂が径52cm・深さ61cm、P₃が径65cm・深さ65cm、P₄が径67cm・深さ70cmを測る。柱穴間距離は、P₁-P₂間が3.25m、P₂-P₃間が3.25m、P₃-P₄間が3.35m、P₄-P₁間が3.16mをそれぞれ測る。柱穴に囲まれた部分（柱穴も含む）の面積は20.56m²を測る。

カマドは、北壁の中央部に左袖がくる位置に所在する。擾乱によって大破しており、詳細は不明である。

出土遺物

本跡からは、須恵器壺・蓋・甕・壺、土師器壺・甕が出土した。いずれも小破片のため図示できなかった。須恵器壺底部破片の観察では、すべて回転ヘラ削り調整が施されていた。



第13図 第5号掘立柱建物跡 (1/60)

第5号掘立柱建物跡（第13図）

本跡は、調査区の北端にて検出した。南に9m離れて第11号住居跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は南北2間(3.60m)、東西3間(5.40m)、面積19.44m²を測る。主軸方位は、N-83°Wを示す。柱穴は、10個検出した。各柱穴の平面形態は、長方形を呈する。柱穴の向きは、建物の向きと同方向にならず、桁・梁行に対し斜めに向くものが多い。規模は長軸50~72cm、短軸が35~46cm、深さ10~44cmを測る。柱痕は、検出されなかつた。

	大きさ	深さ		大きさ	深さ		大きさ	深さ		大きさ	深さ
P 1	50×35cm	44cm	P 2	55×38cm	26cm	P 3	64×40cm	20cm	P 4	52×44cm	18cm
P 5	52×44cm	15cm	P 6	56×46cm	35cm	P 7	72×46cm	10cm	P 8	56×41cm	22cm
P 9	65×43cm	40cm	P 10	64×43cm	16cm						

柱穴間距離は、P₁-P₂間が1.88m、P₂-P₃間が1.15m、P₃-P₄間が1.94m、P₄-P₅間が1.55m、P₅-P₆間が1.40m、P₆-P₇間が1.60m、P₇-P₈間が1.48m、P₈-P₉間が1.41m、P₉-P₁₀間が1.41m、P₁₀-P₁間が1.30mをそれぞれ測る。

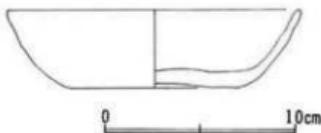
出土遺物

なし。

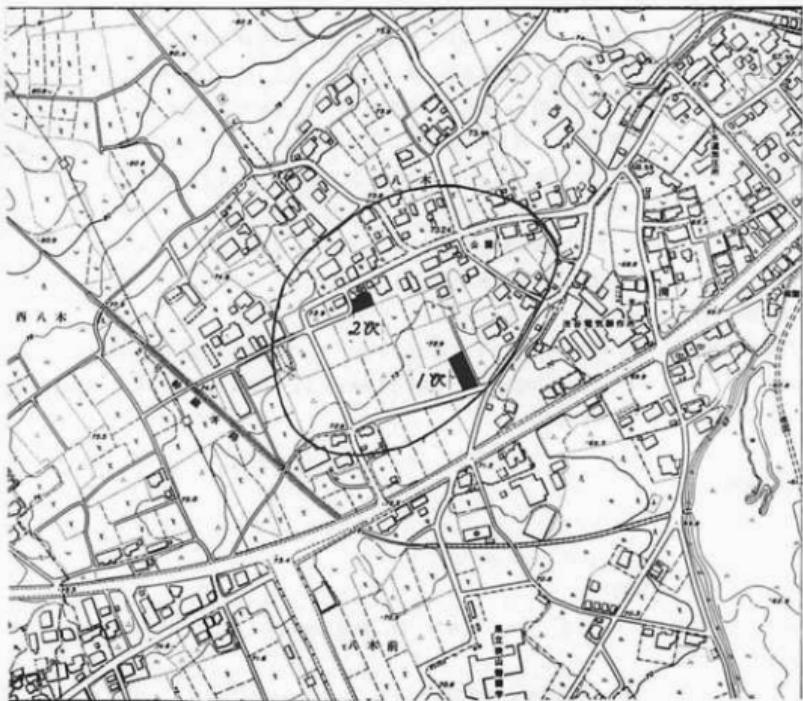
表土出土遺物（第14図）

表土から、須恵器壺・塊・蓋・甕、土師器壺・甕、鐵製品が出土した。図示できるのは、須恵器壺の1点だけである。

須恵器壺 口径15.2cm、底径8.9cm、器高4.1cmを測る。体部は水引き調整。底部は回転糸切り後に外周部に回転ヘラ削りを施す。外面に火だしき痕あり。焼成は良好。胎土に5mm大の石と白色針状物質を含む。色調は灰白色を呈する。底部が厚く、重い製品である。



第14図 出土遺物 (1/3)

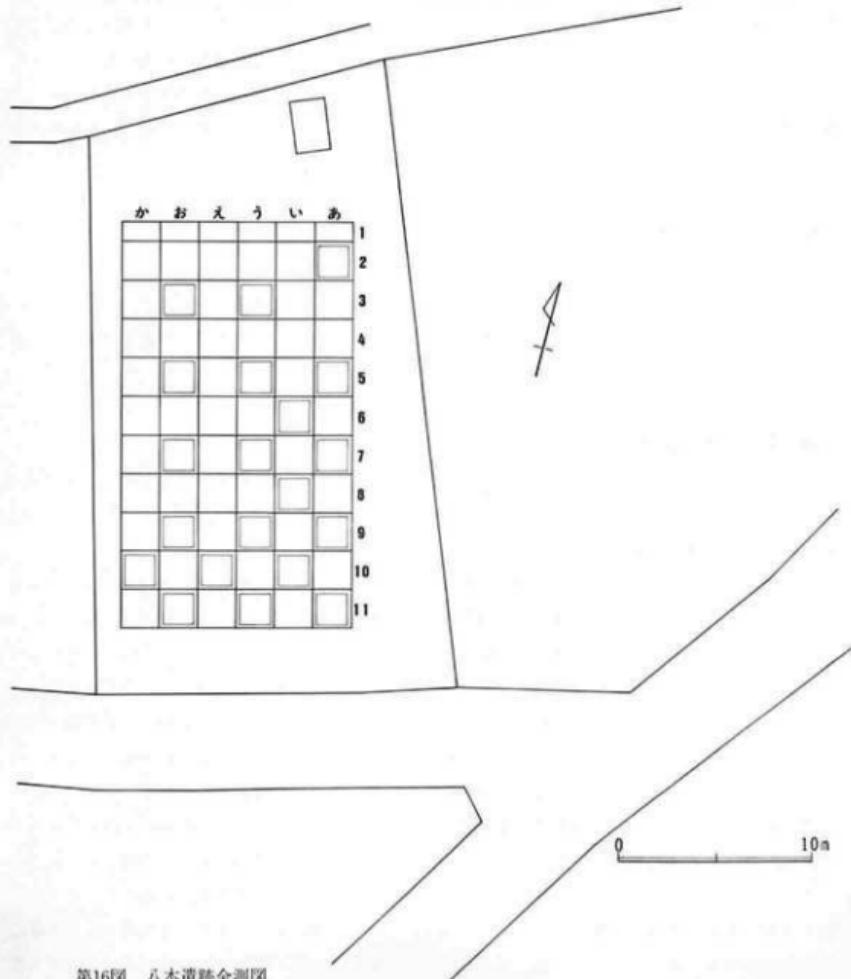


第15図 八木遺跡周辺地形図（1/5,000）

第5章 八木遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から西に直線距離で約4kmの地点に所在する。入間川左岸の台地上に位置する。この付近の地形は複雑で、入間川がここで大きく蛇行しており河岸段丘をいくつも作り出している。また、狭山から川越にかけて開けた沖積地の基点となっている。段丘は、大きくみて3段に分けられる。沖積地との比高差は1段目が3m、2段目が8m、3段目が24mをそれぞれ測る。更に細かくみると2段目は、0.6~1mの比高差をもつ崖線が2か所に認められる。遺跡は、



第16図 八木遺跡全測図

2段目の下段に東八木窯跡、上段に八木遺跡・八木北遺跡、3段目に八木上遺跡・宮地遺跡等が所在する。

分布調査による遺跡の範囲は、270m×200mで面積40,000m²を測る。標高は、73mを測る。縄文時代中期と奈良・平安時代の集落跡である。

調査を実施した周辺の遺跡としては、昭和56年の宮地遺跡・八木北遺跡がある。宮地遺跡では、縄文時代中期の住居跡57軒、奈良・平安時代の住居跡12軒、八木北遺跡では奈良・平安時代の住居跡1軒が発見されている。

調査区は南北に長い長方形で、南北30m、東西17m、面積482m²を測る。遺跡南端の小段丘との境のため傾斜したところに位置する。調査方法は人力によるグリッド掘削とし、北東隅を基点として2×2mのグリッドを66個設定した。グリッドの呼称は、北東隅を基点として西に五十音、南に数字で(○×○)Gと表わした。調査の結果、擾乱が多数あって遺構は検出できなかったが縄文土器が多数出土した。標準土層は表土層が小石混りの黒色土で、その下にローム混りの疊層が所在する。

第2節 調査経過

昭和62年

5月21日 グリッドを設定して、掘削を開始。各グリッドから縄文土器が多量に出土。

5月22日 グリッドの掘削・遺構確認を実施。遺構は発見されなかったので、埋めもどしをして調査を終了。

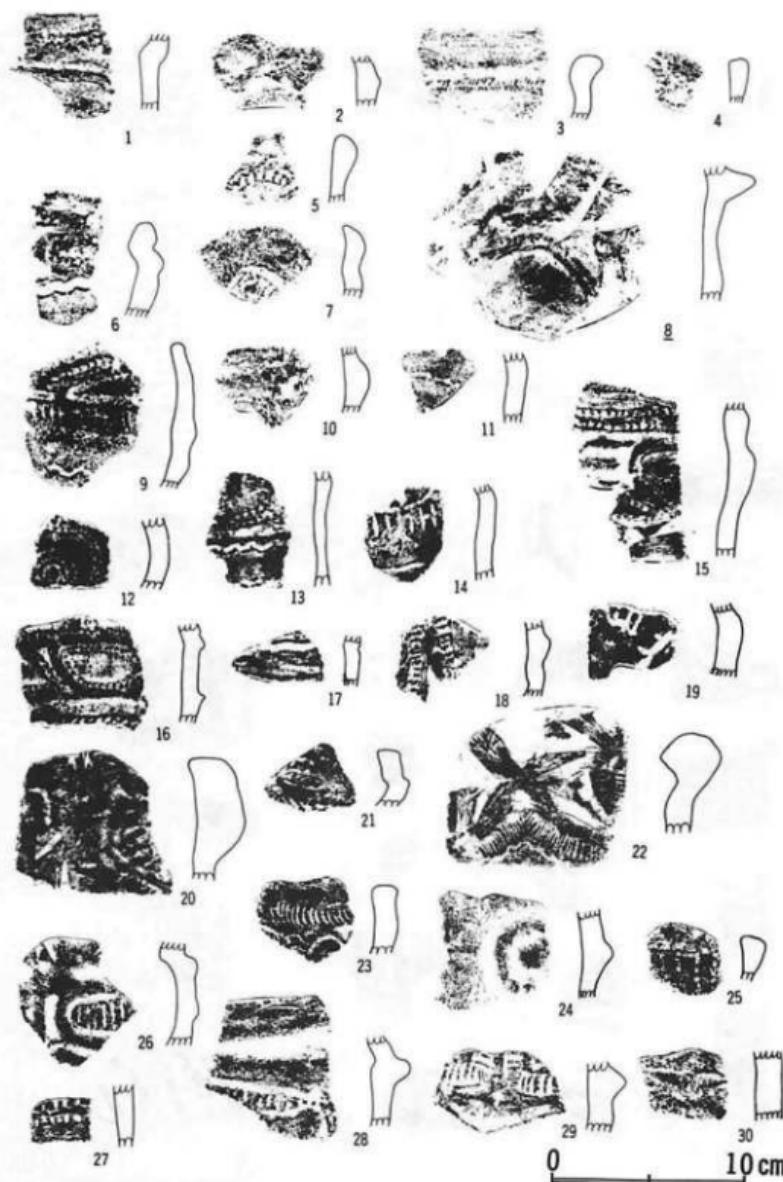
第3節 遺構と遺物

遺構は、検出されなかったが、多量の縄文土器が出土した。出土状況には特徴がなく、表土層全体から出土した。本節では、個々の土器について述べていく。

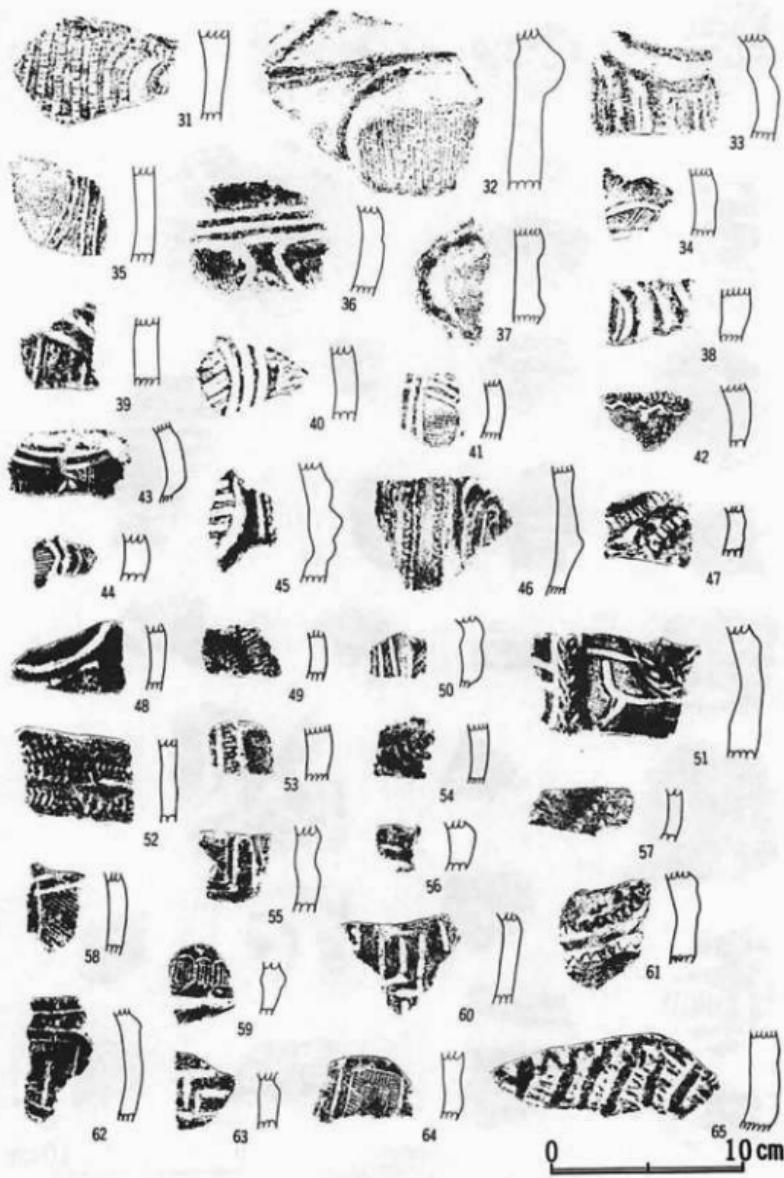
第1群 土器縄文時代中期の土器片と思われるもの。(1~253)

第1類 (1~17, 19) 阿玉台式土器と思われる土器片で、表面に金雲母が見られる。1は、浅鉢口縁部と思われる破片で、粘土紐による隆帯を呈し、撚糸を施している。4, 6は、口縁装飾部分と思われる破片である。8は、深鉢口縁装飾部分と思われる破片で、粘土紐による楕円区画の隆帯を施している。9は、深鉢口縁部と思われる破片で、粘土紐による隆帯を廻らし、爪形文が施してある。10は浅鉢と思われ、16は深鉢と思われるもので、両方も口縁部に粘土紐による隆帯で区画した破片で、竹管文が施してある。12は、胴部破片と思われるもので、うず巻に竹管文を廻らしてある。11, 13は、キャリバー状深鉢口縁部の破片で、無文帶に竹管文が施してある。

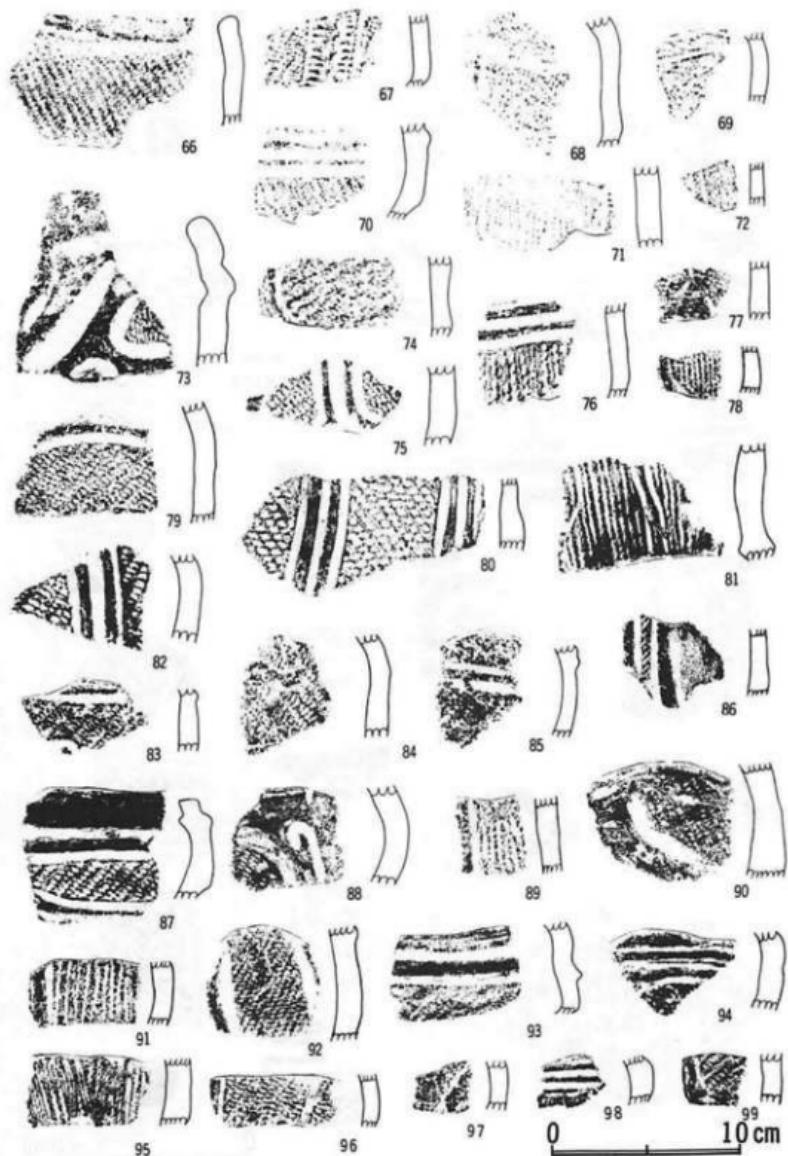
第2類 (18, 20~65, 105) 勝坂式土器と思われる土器片である。18は、胴部破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を施し、上下に爪形文が廻してある。20は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に突起を有している。21, 105は、口縁部破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、爪形文が施してある。22, 29は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に突起を有し、竹管文を施してある。23は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、無文帶



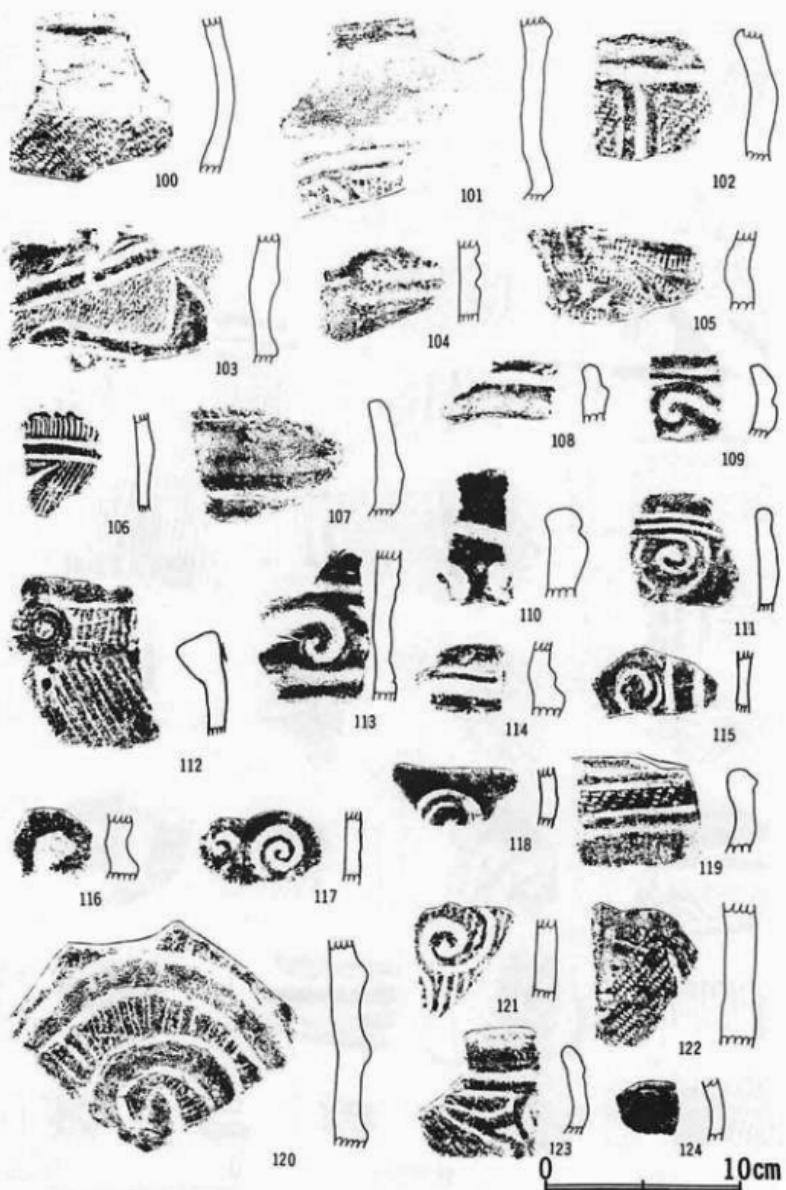
第17図 八木道路出土遺物 ① (1/3)



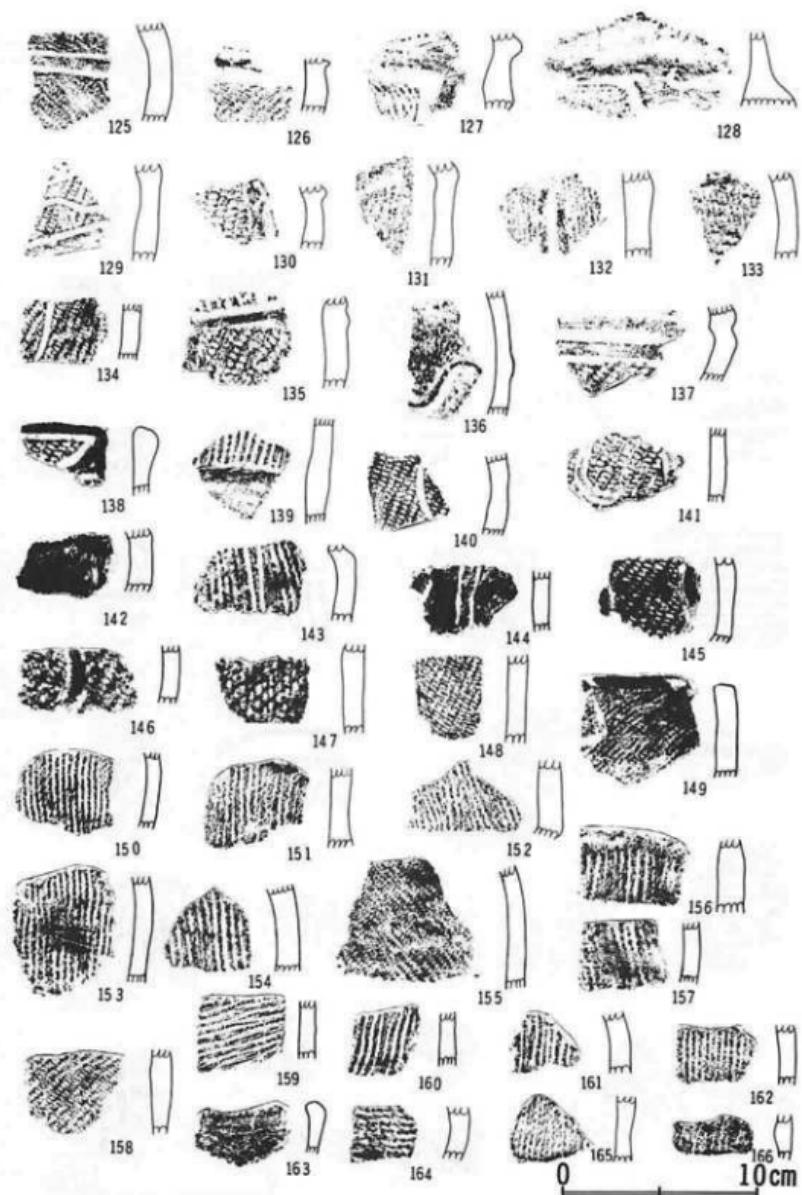
第18図 八木遺跡出土遺物 ② (1/3)



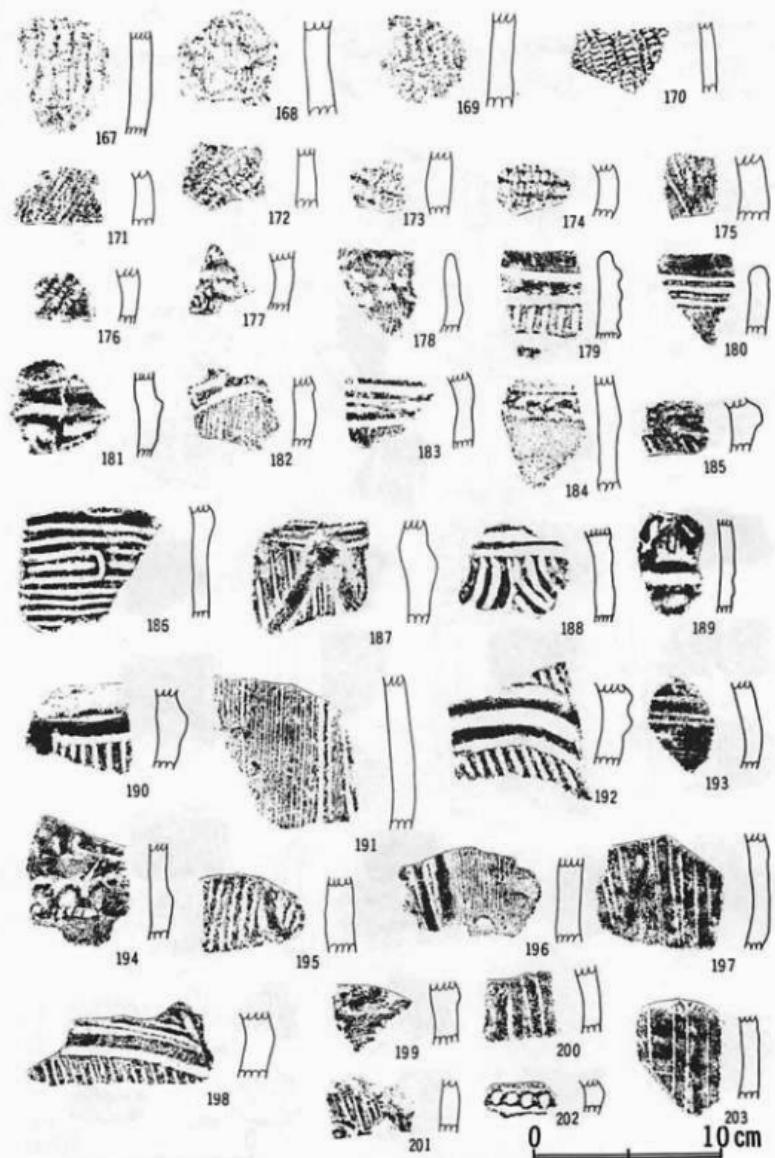
第19图 八木道路出土物 ③ (1/3)



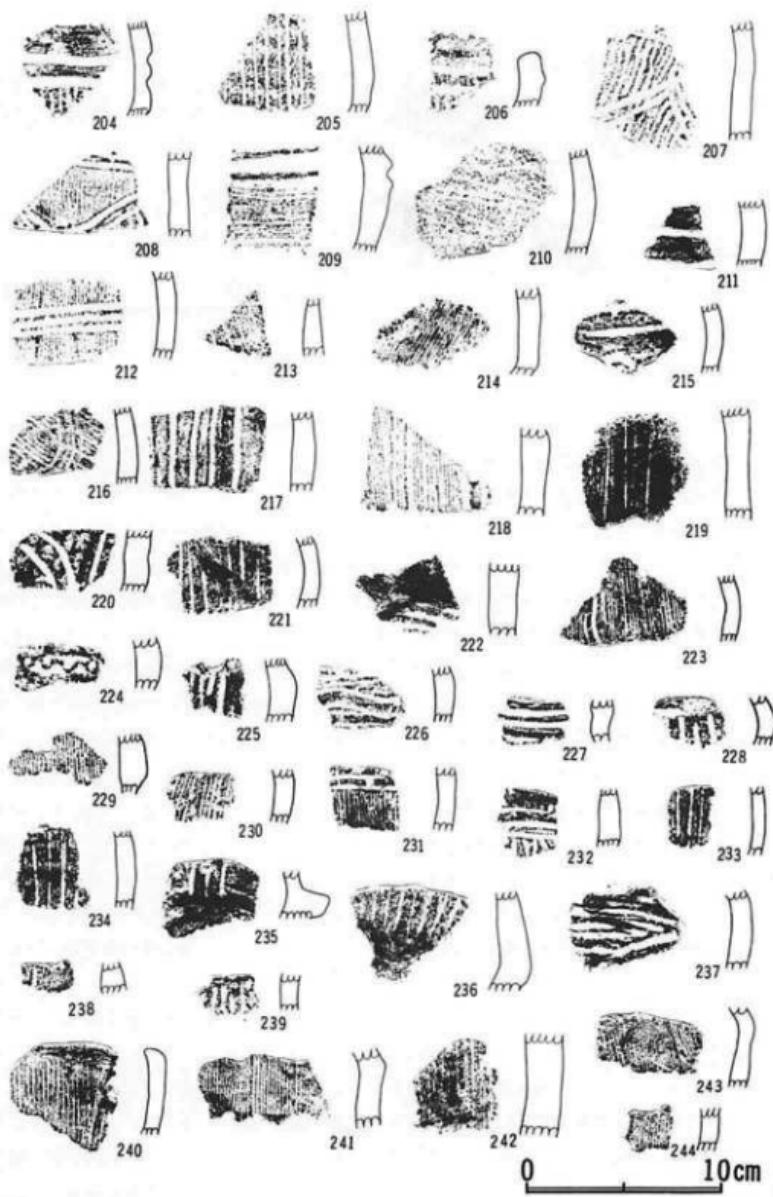
第20図 八木道跡出土遺物 ④ (1/3)



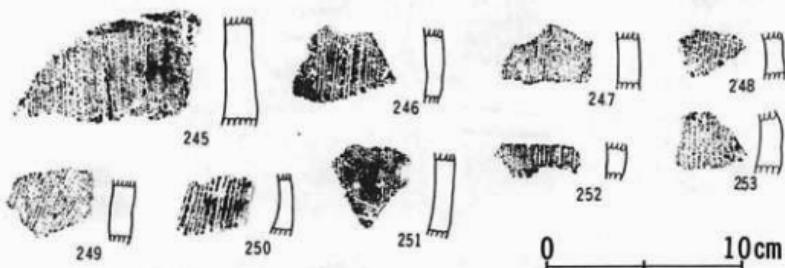
第21図 八木遺跡出土遺物 ⑤ (1/3)



第22図 八木遺跡出土遺物 ⑥ (1/3)



第23図 八木道路出土遺物 ⑦ (1/3)



第24図 八木遺跡出土遺物 ⑧ (1/3)

に粘土紐による隆帯で楕円区画が施してある。25は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、竹管文を施してある。26は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による区画隆帯と幅広の沈線による区画文が施してある。28は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に突起を有し、幅広の沈線が施してある。31は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、条線上や楕円形上に竹管文が施してある。32は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯で楕円形で区画しており、条線を施してある。33, 38, 39は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯で楕円形に区画し、幅広の沈線が施してある。34, 35, 36, 43は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の区画文や楕円形に区画され、条線が施されている。37は、深鉢胴部装飾部分と思われる破片で、粘土紐による楕円形上の隆帯を有し、内側に条線が施してある。46は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、竹管文が施してある。47, 57, 61は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、竹管文が施してある。51は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に竹管文を施し、幅広の曲線沈線を有している。59は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、沈線による磨消文を有し、爪形文と竹管文を施してある。60, 63は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線による区画文を有し、竹管文を施してある。62, 64は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線による区画文を有し、竹管文を施してある。65は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線と粘土紐による隆帯を格子状に廻らしてある。

第3類 (66~253) 加曾利式土器と思われる土器片である。66は、深鉢と思われる口縁部の破片で、地文はRLの繩文を充填する。67は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線が平行上に施してある。68, 96, 140は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有し、地文はLRの繩文を充填する。70, 80, 125は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に幅広の磨消文を施してあり、地文はRLの繩文を充填する。71, 78, 81は、深鉢胴部の破片と思われる、曲線沈線を有し、撚り糸を施してある。73は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に幅広の沈線を有し、地文はRLの繩文を充填する。84, 135, 136, 228は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、地文はRLの繩文を充填する。88, 90は、

深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の磨消による楕円区画文を有し、地文は RL の縄文を充填する。89, 91, 95, 143, 151は、胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有し、撚糸を施してある。100, 101は、外反するキャリバー状深鉢口縁部の破片と思われるもので、無文帶を有しており、下部には LR の縄文を充填する。102は、外反するキャリバー状深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による区画文の隆帯を有し、地文は LR の縄文を充填する。103は、外反するキャリバー状口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯間に撚糸を廻らして区画する磨消文を施してある。105は、深鉢胴部の破片と思われるもので、全体に竹管文を施してある。107, 110は、深鉢口縁部の破片と思われ、108は、浅鉢口縁部の破片と思われ、無文帶に粘土紐による隆帯と幅広の磨消文を有している。109, 113は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯をうす巻状に廻らしてある。112は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、上面部に粘土紐による隆帯にうす巻状の突起を廻し、表面は、曲線による沈線を有している。115～117は、口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯をうす巻状に廻らしてある。120は、深鉢口縁装飾部分の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯をうす巻状に廻らしてある。121は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線によるうす巻状に磨消文を有してある。124, 148, 158は、胴部の破片と思われるもので、地文は LR の縄文を充填する。127は、粘土紐による区画文の隆帯を有し、地文は RL の縄文を充填する。128は、深鉢底部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有し、撚糸を施してある。135は、粘土紐による隆帯に竹管文を施してあり、地文は LR の縄文を充填する。138は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による区画文隆帯を廻し、地文は LR の縄文を充填する。139, 236は、深鉢底部の破片と思われるもので、幅広の条線を施し、下は無文帶を有する。149は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、地文は LR の縄文を充填する。148, 171, 172, 176は、LR の縄文を充填する。150～154は、深鉢胴部の破片と思われるもので、撚糸を有している。155は、深鉢胴部の破片と思われるもので、地文は RL の縄文を充填する。156は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、撚糸を有する。157, 160～162, 165, 166は、胴部の破片と思われるもので、撚糸を有している。158, 171, 172, 176は、LR の縄文を充填する。163は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を廻し、無文帶を有してある。169, 170は、RL の縄文を充填する。178は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、無文帶に押圧文を施してある。179, 190は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有し、幅広の磨消文を施してある。180は、浅鉢口縁部の破片と思われ、182, 209, 231は、深鉢胴部の破片と思われ、粘土紐による隆帯に幅広の磨消文を有し、条線を施してある。184は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、無文帶に押圧文を施してある。185は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の磨消文を平行上に有してある。187は、幅広の磨消文を有し、粘土紐による隆帯を廻し、中央部に突起を施してある。188, 207は、幅広の曲線沈線による磨消文を有してある。191, 218, 223, 241～243, 245, 246は、深鉢胴部の破片と思われるもので、条線を有してある。192, 198は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の曲線隆帯を有し、沈線による幅広の条線を施してある。195, 197, 200, 203, 205, 219, 233, 234は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有してある。194は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を施してある。202は、胴部の破片と思われるもので、竹管文を施してある。208は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線によ

る磨消文を有し、条線を施してある。212は、幅広の沈線による磨消文を有し、条線を施してある。214, 229, 230, 244, 247~253は、胸部の破片と思われるもので、条線を有してある。217は、幅広の沈線による磨消文と粘土紐による隆帯を有してある。224は、粘土紐による隆帯を廻し、竹管文を施してある。226, 227, 237は、幅広の曲線沈線を有してある。

(水越佳宏)



第6章 御所の内遺跡5次の調査

第1節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西に直線距離で約2.2kmの地点に所在する。入間川左岸の台地上に位置している。台地上はほぼ平坦で、北東に向けてゆるく傾斜して低くなっている。分布調査による遺跡の範囲は540m×290m、面積にして102,000m²を測る。標高は西端が55m、東端が50mで、入間川沖積地との境は急崖を形成して比高差12mを測る。奈良から平安時代にかけての集落遺跡である。昭和58年から4次にわたり調査を実施しているが、遺構は検出されていない。北側に城ノ越遺跡、南に小山ノ上遺跡が所在している。

調査区は東西に長い長方形を呈し、29×17mの面積450m²を測る。遺跡内の北方に位置する。調査方法は、2×2mのグリッドを98個設定して、人力により掘削・遺構確認を行った。区域内に多量の残土が置かれ、調査した場所は限られたものとなった。グリッドの呼称は、北東隅を基点として西に五十音、南に数字で(○-○)Gと表わした。調査の結果、遺構は検出しなかった。



第25図 御所の内遺跡周辺地形図 (1/5,000)

第2節 調査経過

昭和62年

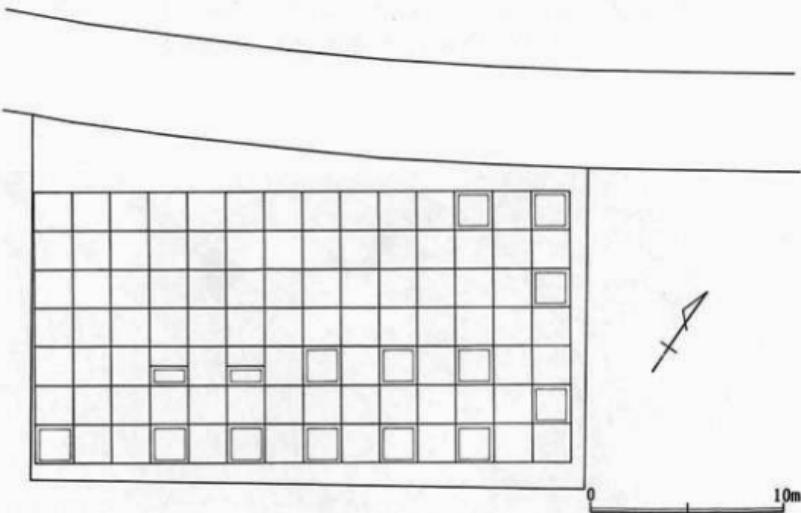
6月15日 調査区内の下草刈りを実施したのち、グリッドを設定した。降雨により11時で作業中止。

6月16日 グリッドの調査を開始。ローム面まではかなり深い。

6月17日 グリッドの調査。遺構は検出しなかった。全体測量・全景写真撮影を実施して調査を終了。

第3節 遺構と遺物

遺構・遺物とも検出しなかった。



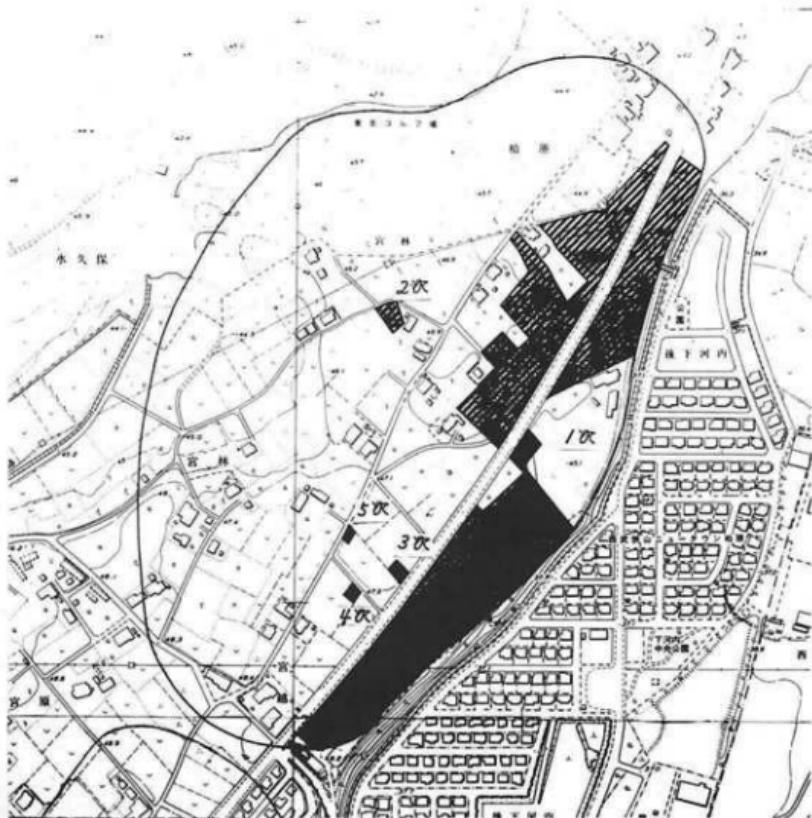
第26図 御所の内道路 5次全測図 (1/300)

第7章 宮ノ越遺跡3・5次の調査

第1節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北へ直線距離で約3.5kmの地点、入間川左岸の台地上に位置する。台地上はほぼ平坦で、西から東に向けてゆるく傾斜して低くなっている。標高は遺跡の西端で48m、東端で44mを測り、入間川の沖積地との境は急崖を形成して比高差10mを測る。台地の北西側には入間川と平行に谷があり、水田耕作の適地となっている。この谷と台地との比高差は2mを測る。

分布調査による遺跡の範囲は640×390m、面積にして175,000m²を測る。奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和53・54年に埼玉県遺跡調査会が宅地造成に伴い、また昭和60年に当教育委員会が住宅建設に伴い発掘調査を実施している。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡66軒、掘立柱

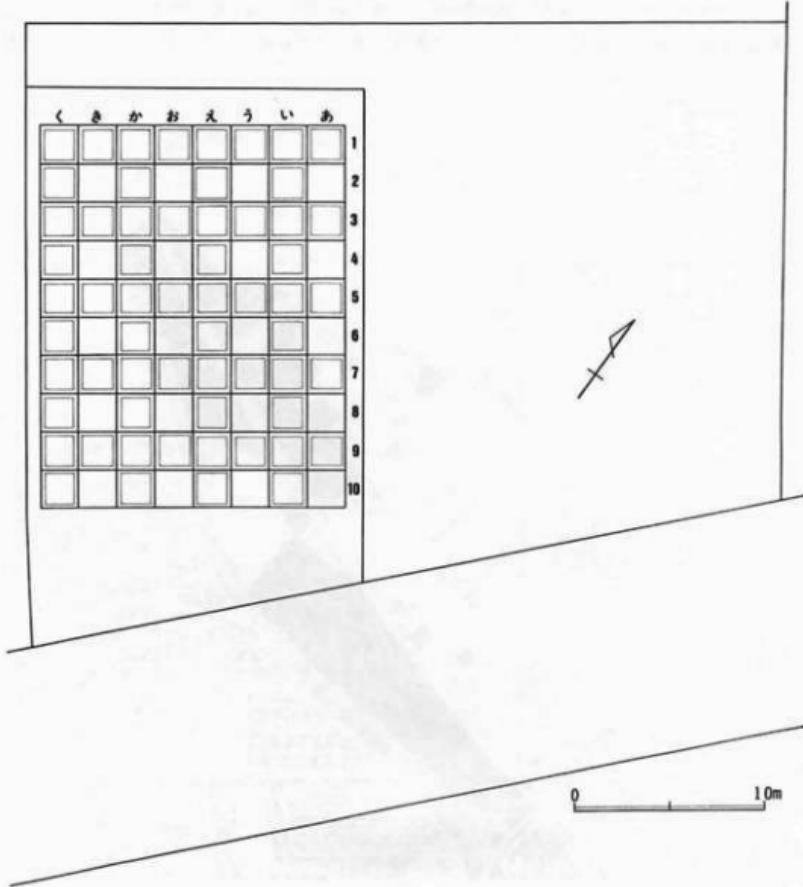


第27図 宮ノ越遺跡周辺地形図 (1/5,000)

建物跡19棟、墳墓3基が発見されている。

3次調査区は、南北に長い長方形を呈し $28 \times 18m$ 、面積 $492 m^2$ を測る。遺跡の中央やや南に所在する。調査方法は $2 \times 2 m$ のグリッドを70個設定し、4つに1つの割合で人力による掘削・遺構確認を行った。グリッドの呼称は、北東隅を基点として西に五十音、南に数字で(○-○) Gと表わした。土層は、耕作土が約 $0cm$ の厚さで堆積して、その下がローム層となっている。調査の結果、遺構・遺物とも検出しなかった。

5次調査区は、台形を呈する。規模は、 $15 \times 13m$ で面積 $142 m^2$ を測る。遺跡の中央やや南に所在する。区域内に多量の土砂が置かれており調査できる場所が限られていたのでトレンチ調査とした。トレンチは、幅 $1m$ 、長さ $10m$ の規模で2か所設定した。土層は耕作土が $60cm$ 堆積し、その下がローム層となっていた。



第28図 宮ノ越遺跡3次全測図 (1/300)

ーム層となっている。調査の結果、遺構・遺物とも検出しなかった。

第2節 調査経過

3次調査（昭和62年）

11月5日 グリッドを設定して、4つに1つの割合で掘削・遺構確認を実施。

11月6日 遺構確認作業の実施。その結果、遺構・遺物とも検出しなかった。全体測量・全景写真撮影を実施してからグリッドを埋めて調査を終了。

5次調査（昭和63年）

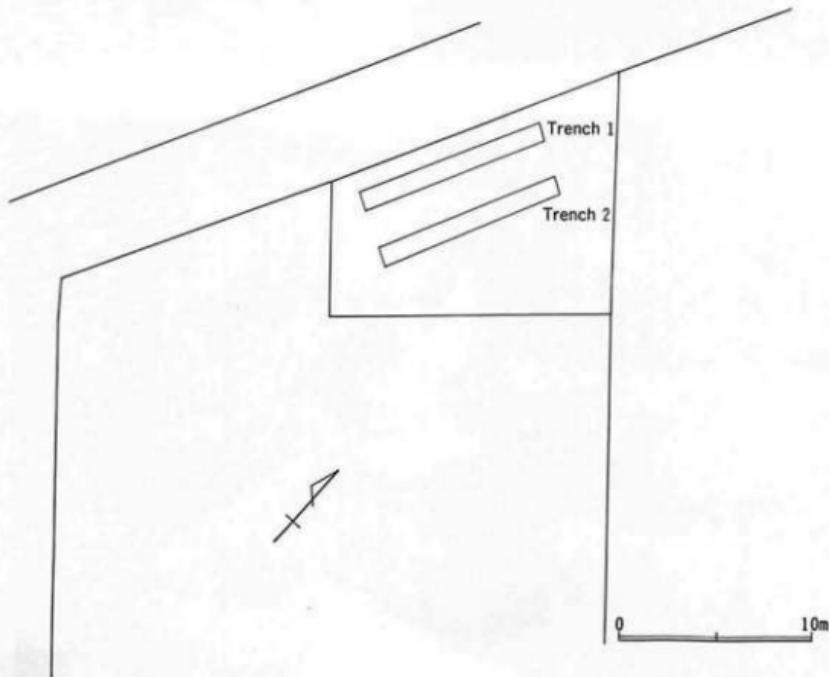
3月3日 調査区内の土砂を移動してからトレンチを設定。遺構確認を実施。

3月4日 遺構確認作業を実施。その結果、遺構・遺物とも検出しなかった。全体測量・全景写真撮影を実施してからトレンチを埋めて調査を終了。

第3節 遺構と遺物

3・5次調査

遺構・遺物とも検出しなかった。



第29図 宮ノ越道路 5次全測図 (1/300)



第8章 結語

本書では、5遺跡7調査で得られた成果を収めたもので、それについては前章で記述したところである。本章では、遺構と遺物を検出した小山ノ上・城ノ越・八木遺跡について若干のまとめを記述する。

小山ノ遺跡

1次から5次の調査で竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡15棟、棚列1条、堀1条、集石1基を検出した（坂野・1986、中村・1987、小瀬・1988）。今回の調査では、1次調査（注1）で既に検出されていたもので、住居跡の全容を確認しただけで、遺構数は変わらなかった。

出土遺物は、表土層から細碎片で少量出土した。この中で、円面鏡が出土したことが特筆される。5次調査区でも1点出土している。当遺跡では、竪穴住居跡に近い数で掘立柱建物跡が検出されている。遺物も円面鏡・帶金具・「小山」と書かれた墨書き器等の特殊な遺物が出土していることから、一概的な集落とは異った性格をもつ集落と考えられる。

土塁は、2基検出した。いずれも掘り方が浅く、遺物も出土していないので性格等は不明である。掘り方は類似しており、並んで存在することなどから同じ性格のものと推定できる。

城ノ越遺跡

1次から今回の6次調査により、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟を検出した。各調査区が遺跡内に散在している関係上、遺跡全体についての状況は不明であるが、遺構を検出した1・3・5次の調査区は遺跡の北東部、北西部、中央にそれぞれ位置しており、遺跡内の全体にわたって遺構が分布していることを示している。

5次調査区では、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。遺構の遺存状態が悪く、出土遺物が少なくて図示できるものが1点もなかった。従って、特定できるものはないが、須恵器壺の底部破片の観察から8世紀代の時期を推定できる。

竪穴住居跡3軒の内第11・12号住居跡の2軒が、一辺の壁長が6mの大規模住居であることが特筆される。第10号住居跡が一部調査区域外にかかり全容は明らかではないが、一辺の壁長が4m大であるのと比べると格段の開きがある。第11・12号の両住居跡ともカマドを北にして、主軸方位もほぼ同じで、壁溝・柱穴等の施設に類似点が多い。カマドは、いずれも大破しており全容は不詳だが、住居跡の大きさに比べて小さく、平均的な大きさの住居跡のカマドと同じような規模である。柱穴は、4本が方形に巡る整った形で、第11号住居跡は平均して径50.7cm、深さ47.5cm、第12号住居跡が径58.5cm、深さ69.2cmでその差が径で7.7cm、深さで21.7cmあり、第12号住居跡のほうが大きく住居跡の規模に比例している。第11号住居跡は、6.00×6.15mの建築面積が36.9m²で、第12号住居跡は6.78×6.49mの建築面積44.0m²で、第12号住居跡が7.1m²程大きい。第10号住居跡の建築面積が15.9m²であるから第12号住居跡が2.7倍の面積を有する。両住居跡の間は、5mしか離れていないので、軒先を考えれば同時存在は不可能と思われる。時期差は、出土遺物が両住居跡とも少

量のため明確ではないが、須恵器底部破片での観察ではいずれの住居跡とも回転ヘラ削り調整を施してあり、極だった差はないものと思われる。

掘立柱建物跡は、当市で普遍的に検出される2間×3間の規模であるが、建築面積が狭い。柱穴の向きに特徴が認められた。各コーナー部の柱穴は、向きが建物の向きに対して斜めを向いている。これは、当市の小山の上遺跡（小瀬・1988）1～4・6・9号掘立柱建物跡で類例が認められている。その報告で、コーナー柱が『L型を呈する掘立柱建物跡（例では城ノ越遺跡第1号掘立柱建物跡）の変形であるとしたが、本例も同様であろう。

注1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査したもので、当時は当市の調査と期間が重複したため遺構番号について統一がとれなかった。そこで当市では、この調査を1次と呼称する。2～6次調査では、遺構番号を連番としている。

八木遺跡

今回の調査では、遺構の存在は認められなかったものの、多くの縄文土器が得られた。表土層から基盤のローム層中に小砾を多数含み、生活条件に悪い。出土した縄文土器は、土質の関係で遺存状態が悪く器表面が荒れている。出土した土器は、阿玉台式・勝坂式・加曾利E式期のもので、加曾利E式期の土器がもっとも多く出土している。

分布調査（増田・他 1986）では、縄文時代中期の勝坂式・阿玉台式・加曾利E式期の土器が表採されており、今回の調査で遺跡の内容の一端を現わした。

当遺跡の上位段丘に500m離れて宮地遺跡（増田・他 1986）が所在する。宮地遺跡では、勝坂・阿玉台式・加曾利E式期の住居跡69軒が発見されており、それは環状集落を呈している。当遺跡と時期が重っており、同時存在が考えられる。当遺跡は前述のごとく、立地場所が宮地遺跡に対して条件が悪いが、水の確保だけは良好である。同時期に宮地遺跡とこの近距離で共存できるのであろうか。或いは、同じ領域内として相互に移住をくりかえしたのであろうか。いずれにしろ、両遺跡の詳細な分析が必要である。

引用・参考文献

- 小潤 良樹 1985「城ノ越遺跡3次」狹山市埋蔵文化財調査報告書 狹山市教育委員会
1986「掲櫛木遺跡」狹山市埋蔵文化財調査報告書4 狹山市教育委員会
1987「今宿遺跡」狹山市埋蔵文化財調査報告書5 狹山市教育委員会
1988「小山ノ上遺跡2~5次」狹山市埋蔵文化財調査報告書7 狹山市教育委員会
駒見 和夫 1982「宮ノ越遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第44集 埼玉県遺跡調査会
埼玉県歴史資料館 1983「鎌倉街道上道」歴史の道調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
曾根原裕明 1983「飯能市遺跡分布図」 飯能市教育委員会
1984「飯能遺跡(1)」 飯能市教育委員会
中平 薫 1980「日高町遺跡分布調査報告書」 日高町教育委員会
中村 倉司 1988「小山ノ上」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
坂野 和信 1986「年報6」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田 正博 1978「城ノ越遺跡」 狹山市城ノ越遺跡調査会
増田正博・鹿島英明・小潤良樹 1986「狹山市史 原始・古代編」 狹山市



図 版

図版 1



小山ノ上遺跡 6次調査前全景



小山ノ上遺跡全景

図版 2



◀ 第5号住居跡
▲ 第1号土塁
▼ 第2号土塁



図版 3

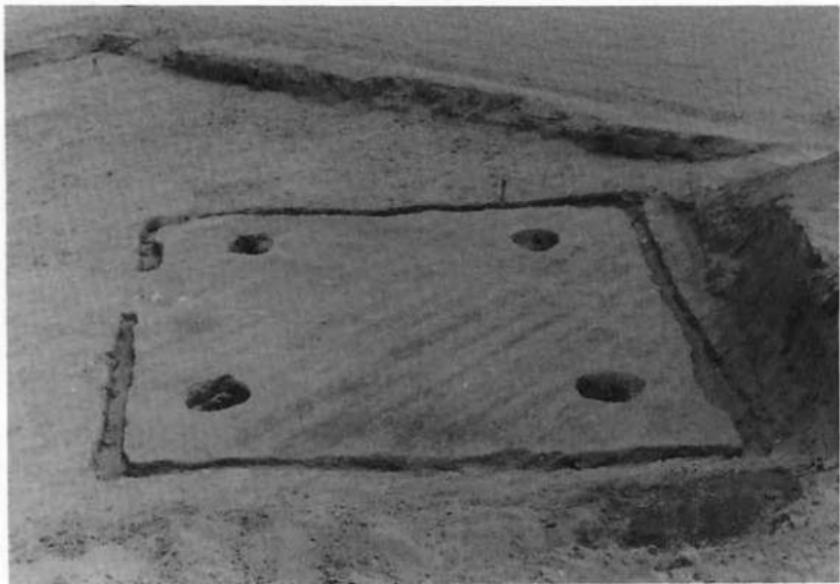


城ノ越遺跡5次全景

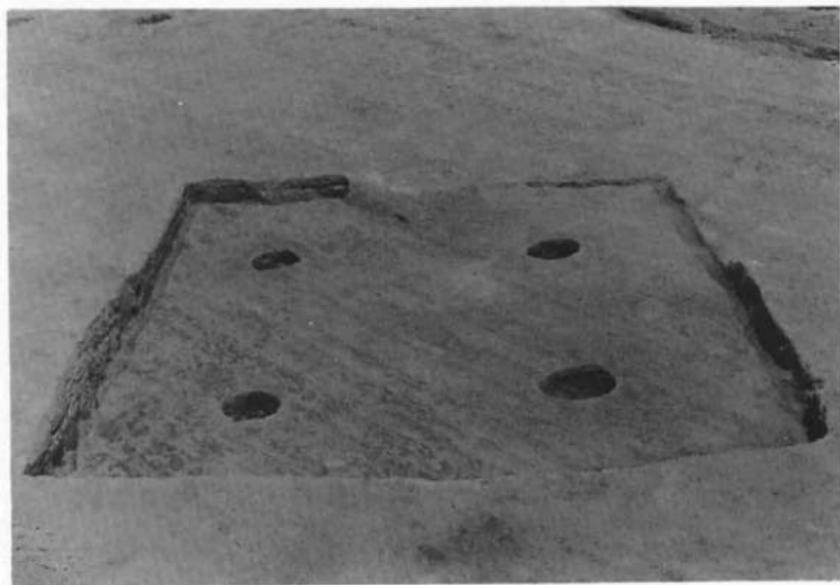


城ノ越遺跡第10号住居跡

図版 4



城ノ越遺跡第11号住居跡



城ノ越遺跡第12号住居跡



城ノ越遺跡第5号掘立柱建物跡



城ノ越遺跡6次全景

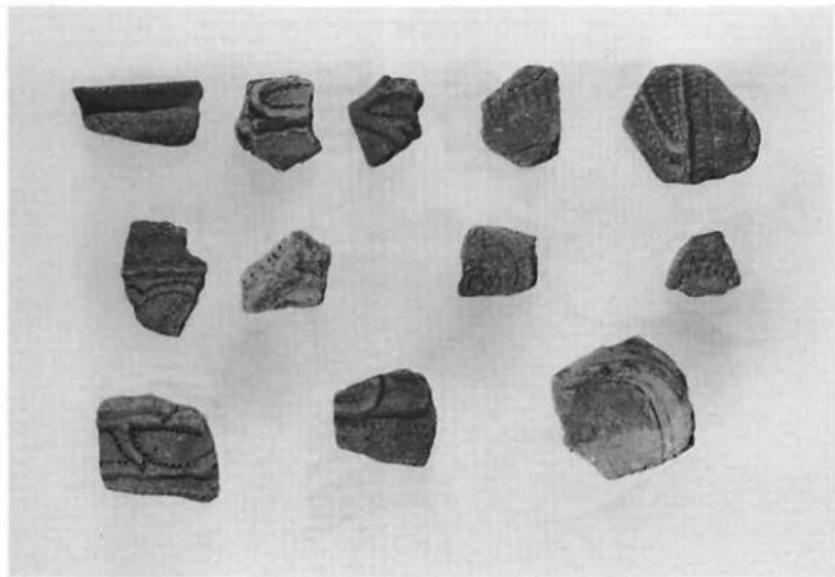
図版 6



八木遺跡調査前全景



八木遺跡全景

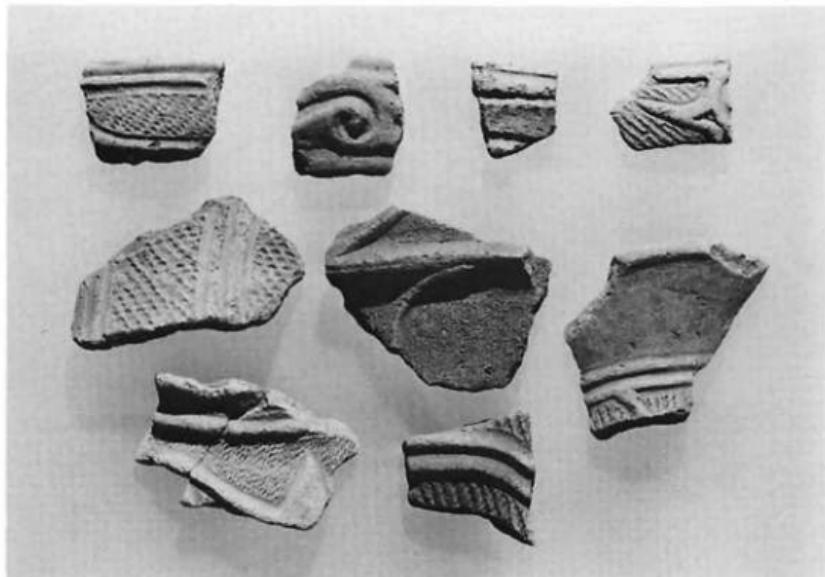


八木遺跡出土遺物

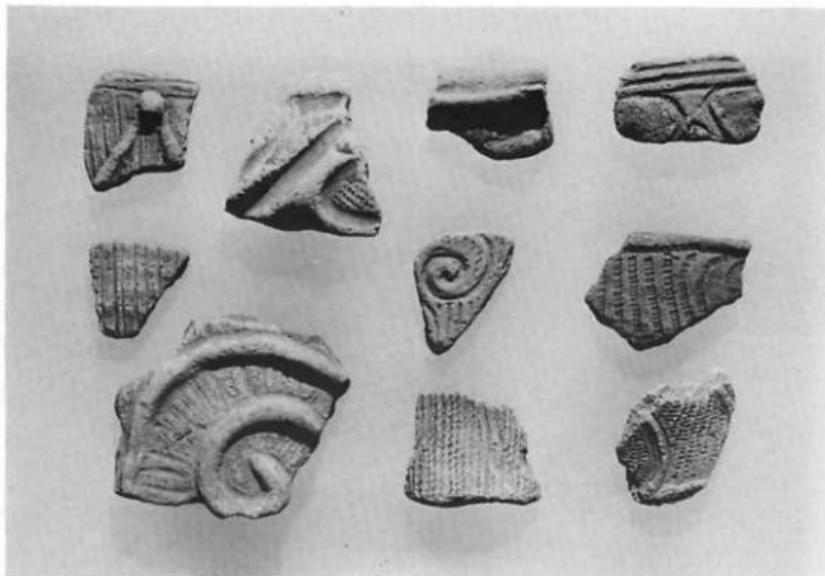


八木遺跡出土遺物

図版 8



八木遺跡出土遺物



八木遺跡出土遺物

図版 9

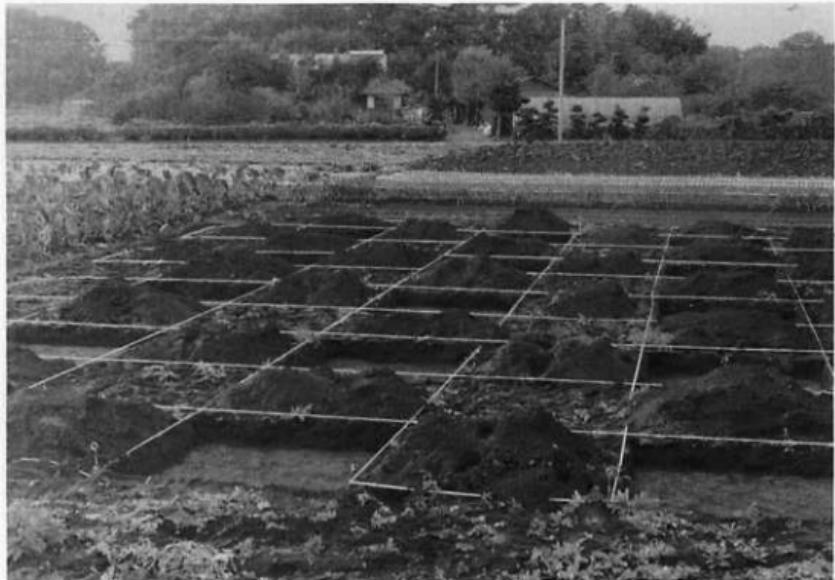


御所の内遺跡 5 次全景



宮ノ越遺跡 3 次調査前全景

図版 10



宮ノ越遺跡3次全景



宮ノ越遺跡5次全景

平成元年10月25日 印刷
平成元年10月30日 発行

狹山市文化財調査報告
狹山市埋蔵文化財調査報告書

発行 県玉県狹山市教育委員会
埼玉県狹山市入間川1-23-5
電話 0429(53)1111
印刷 三木五十子印刷
埼玉県狹山市狹山14-8
電話 0429(52)2701

報告書抄録

ふりがな	こやまのうえいせき6じ／しろのこしいせき5・6じ／ばちぎいせき／ごしょのうちいせき5じ／みやのこしいせき3・5じ
書名	小山ノ上遺跡6次／城ノ越遺跡5・6次／八木遺跡／御所の内遺跡5次／宮ノ越遺跡3・5次
副書名	
巻次	狭山市文化財報告16
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	8
著者氏名	小淵良樹・水越佳宏
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会
所在地址	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1-23-5 TEL04-2953-1111
発行年月日	西暦1989(平成元)年10月30日

所轄遺跡名	所在地	コード		世界遺産系		調査期間 (年)	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東經			
小山ノ上遺跡	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字小山ノ上1248-4	22	11	35.87785	139.397797	19870406 ～19870410	330	個人住宅建設
城ノ越遺跡	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字城ノ越2319-3	22	13	35.8865	139.408498	19870501 ～19870515	767	個人住宅建設
	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字城ノ越2308			35.88826	139.409215	19880217	330	個人住宅建設
八木遺跡	埼玉県狭山市大字笠井 あさひのとよし 字八木2665-2	22	68	35.84744	139.367377	19870521 ～19870522	482	個人住宅建設
御所の内遺跡	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字御所の内2438-16	22	12	35.88192	139.406472	19870615 ～19870617	450	個人住宅建設
宮ノ越遺跡	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字宮ノ越3625	22	16	35.89009	139.411345	19871105 ～19871106	492	個人住宅建設
	埼玉県狭山市柏原 あさひのとよし 字宮ノ越3626-5			35.89011	139.41212	19880303 ～19880304	142	個人住宅建設
所轄遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小山ノ上遺跡 第6次調査	集落跡	奈良・平安時代	住居跡 土壙	1軒 2基	須恵器、土師器			
城ノ越遺跡 第5次調査	集落跡	奈良・平安時代	住居跡 掘立柱建物跡	3軒 1棟	須恵器、土師器、鉄製品			
城ノ越遺跡 第6次調査	集落跡	奈良・平安時代	なし	なし				
八木遺跡 第1次調査	集落跡	調文時代	なし	調文土器				
御所の内遺跡 第5次調査	集落跡	奈良・平安時代	なし	なし				
宮ノ越遺跡 第3次調査	集落跡	奈良・平安時代	なし	なし				
宮ノ越遺跡 第5次調査	集落跡	奈良・平安時代	なし	なし				

【正誤表】

小山ノ上遺跡6次／城ノ越遺跡5・6次／八木遺跡／御所の内遺跡5次／

宮ノ越遺跡3・5次

(狭山市文化財調査報告16)

ページ	行	誤	正
挿図目次	第3図	小山の上	小山ノ上
2ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	46 坂上遺跡	22029	22030
	48 上中原遺跡	22089	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
	55 台遺跡	22085	22084
3ページ	23行目	下並木	下双木
10ページ	12行目	○m	150m
	17行目	○m	150m
	34行目	エベレーション図	エレベーション図
38ページ	5行目	小山の上	小山ノ上